

第24期考古学セミナー（2022年度）

—最上地域の縄文時代—

第3回講座

講義⑤

最上地域の縄文時代晩期の遺構と遺物

(公財) 山形県埋蔵文化財センター

小林 圭一 氏

令和4年10月9日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

最上地域の縄文時代晩期の遺構と遺物

小林圭一

1. 最上地方の縄文時代晩期

(1) 最上地方の地理的特徴

最上地方は最上川中流域でも下流に位置しており、庄内地方とは出羽山地を横断する最上峡で画され、平地としては新庄盆地、向町盆地が存する。段丘地形の発達に特徴付けられ、冬季の降雪に関しては国内有数の豪雪地帯に数えられている。

新庄盆地 新庄盆地は内陸盆地群の一つで、最上地方の中心に位置する。東は神室山地、北は丁岳山地、西は出羽山地に囲まれ、南は猿羽根根山丘陵で尾花沢盆地と画される。盆地の南西部の一角を最上川本流が穿入蛇行し、これに向かって東から小国川、北から鮭川、南から銅山川等が合流する。盆地の内部には標高 100～200 m の丘陵が発達しており、これ等によってさらに狭義の新庄盆地をはじめ、金山盆地、舟形盆地、鮭川盆地の小盆地に区分さる(図2)。

狭義の新庄盆地は、泉田川扇状地を中心に、指首野川、戸前川、新田川の流域からなり、ほぼ新庄市域に含まれる。東西幅約 14 km、南北幅約 15 km の西方に開いた扇形を呈し、盆地内部に西山丘陵・福田山丘陵等の低起伏の丘陵が存し、北側は東西に張り出した上台丘陵を介して金山盆地に接し、南側は新田川と小国川に挟まれた南山丘陵を介して舟形盆地に接する。盆地の中心を占める泉田川扇状地は、開析が進み低位段丘と化しており、沖積低地は現河川に沿ってのみ分布する。

向町盆地 向町盆地は最上地方の東部に位置する奥羽脊梁山脈中の小盆地で、行政区域では最上町が該当する。同盆地は最上川支流の小国川に沿って細長く形成され、東西幅は約 11 km を測る。隣接の鳴子や鬼首と同様にカルデラ(直径 10～13 km の楕円形)として生成し、周囲は 800～1,300 m 級の急峻な山々に囲まれるが、その内側は緩やかな丘陵地で占められている。小国川は盆地底を南と北から流下した支流を肋骨状に合わせながら西流するが、小国川右岸と北部の支流沿いには、扇状地

を開析した平坦な低位段丘が発達し、特に白川と絹出川に沿って顕著に認められる。また盆地南部には、起伏が大きく開析が進んだ火砕流台地が展開する。

盆地東端の神明川に沿って遡ると、脊梁山脈を横切る標高 350 m の境田越に至り、宮城県内の江合川(荒雄川)水系に連絡する。勾配が緩く、古くより太平洋方面との交通の要衝となっており、現在国道 47 号線や JR 陸羽東線がトンネルのない状態で県境を並走する。東方の標高が低いため、太平洋側からの気流が比較的流入しやすく、夏季には冷涼なヤマセの影響を受けやすい環境にもある。

小国川は向町盆地を抜けると峡谷を穿って約 6 km 西流し、小盆地である舟形盆地へ流入する。小国川に沿った同盆地は、東西幅約 12 km、南北幅 1～2 km と細長く、兩岸には高位・中位・低位段丘が模式的に分布しており、国宝の大型土偶が出土した西ノ前遺跡は小国川に向かって張り出した低位段丘面に立地する。

(2) 最上地方の縄文晩期の遺跡

最上地方の晩期の遺跡数は 51 遺跡で、分布調査の不備から遺跡数が少なく、散漫な分布を示している(図3)。丘陵縁辺や河川の合流・蛇行地点付近に認められ、山間河谷には小川内遺跡(真室川町)や釜淵 C 遺跡(同町)等の比較的遺物量の多い遺跡が位置する。特に釜淵 C 遺跡は後期後葉～弥生前期まで長期にわたった遺跡で、河川の合流点付近に位置している。河川を遡ると秋田県方面に連なる雄勝峠に至ることから、交通の要衝としての役割を担った可能性が考えられる。

新庄盆地の拠点集落と見なされるのが宮内遺跡(新庄市)である。泉田川扇状地の扇端、指首野川と戸前川が合流する低位段丘上に立地し、遺物の数量から大規模な集落跡と考えられている。大洞 B～C2 式に主体があり、盆地南半のほぼ中央に位置することから、周囲の丘陵に点在する遺跡が日常的な行動範囲を示していると考えられる。

小国川流域に位置する向町盆地では、晩期の遺跡は東

西幅約 10 km の範囲に 9 遺跡確認されている。小国川の各支流を 2～3 km 遡った河成段丘上に、狐穴遺跡・げんだい遺跡・水上遺跡・材木遺跡（最上町）といった有力遺跡の規則的な配置（2.5～4 km 間隔）が認められる。それぞれの河川沿いに生活領域が形成されていたのか、資源の消費を適正規模に抑えるための移動の結果であったのか定かではないが、大洞 BC～C2 式までは上記した併存関係が存していた。

最上地方の後・晩期で特記されるのは、28 遺跡で石棒・石剣類が採集されていることである。当該遺跡の 40% 弱に達しており、石棒崇拜の盛行が示唆されるが、石棒類の石材となる粘板岩の産出地である北上山地南部との地理的位置とも無関係ではないであろう。

（3）地域間交流の要衝としての最上地方

山形県は障壁をなす高い山地に囲まれているが、縄文時代を通して奥羽脊梁山脈を挟んで東西の頻繁な接触があったことは、多くの事例で確認できる。交通事情の未発達な当時では、河川に沿う形で人と物資の交流が行われていたと考える。特に四方を山地に囲まれた内陸盆地群においては、他地域に抜けるには山地を越える必要があり、峠につながる山間河谷は重要な経路になっていた可能性が高い。

最上地方は、最上川を通して西方の庄内平野、南方の尾花沢盆地や山形盆地とつながっている。最上川支流の小国川を遡り向町盆地東端の「境田越」を介すると、太平洋側の宮城県に連絡する。また同支流の鮭川・真室川を遡ると、雄勝峠を介して秋田県の横手盆地に通じている。このように新庄盆地は、東西・南北方向の主要ルートが交差した地域に該当する。釜淵 C 遺跡は上記したように雄勝峠に通じた山間河谷に位置しており、中継地であったことが推定され、向町盆地の遺跡群も同様であったのであろう。

2. 亀ヶ岡式土器の特徴

縄文時代晩期は、亀ヶ岡式土器が作られ使われていた時代と規定される。縄文時代の最後を飾る土器で、多様な器種と薄手で精巧な造作、朱漆等による彩色、磨消縄文や半肉彫的手法による複雑で繊細な文様描出などに特徴付けられる。

亀ヶ岡式土器は 1930 年に山内清男氏により 6 つの型

式（大洞 B 式→同 BC 式→同 C1 式→同 C2 式→同 A 式→同 A' 式）に細別され、今日の研究指針が樹立された（表 2、図 1）。筆者は旧稿の中で、亀ヶ岡式土器の特徴を以下の 4 点に集約した（小林 2010）。

- ① 精粗二様の土器の製作
- ② 多様な器種構成
- ③ 精巧な造作と闊達で華美な文様の発達
- ④ 各属性の系統的な変遷

亀ヶ岡式土器は製作の精粗から、精製土器と粗製土器とに二分される。後者は装飾性に乏しい深鉢形土器と鉢形土器が該当し、粗雑で大きな作りで、数量的に圧倒的に多く、器面に炭化物が付着することから、日常的な器具・食器として使用されたと考えられる。一方前者は、数量的に少ないが、装飾性に富み、浅鉢形土器や注口土器等の多様な器種で構成されており、実用的な器物ではなかったと判断される。また縄文施文のみの壺形土器を「粗製壺」、頸部に装飾帯を巡らし体部文様帯を欠く台付鉢等を「半精製土器」に含める場合もある。

亀ヶ岡式土器は、深鉢形土器、鉢形土器（台付を含む）、浅鉢形土器（台付を含む）、皿形土器、壺形土器、注口土器、香炉形土器の 7 器種から構成される。これ等の器種は時間の経過とともに構成比率を変えながら、系統的な変遷を辿っているが、その母体は後期後葉の瘤付土器に確立し、さらには後期中葉の宝ヶ峯式土器の段階まで遡ることができる。

亀ヶ岡式土器の複雑華麗な装飾は、精製土器にのみ適用される。土質緻密、薄手で一般に小形に傾き、器面の調整は縄文のない部分においては甚だ良好で、通常滑沢に富んでいる。文様は闊達と形容されるものの、施文手法には規則性がみられ、複数の文様要素で構成される場合も少なくなく、それ等の組み合わせは型式毎に異なっている。

多様な器種や文様要素で構成される亀ヶ岡式土器は、種々の属性の消長とそれ等の組み合わせから、型式変遷の区分が求められる（表 2）。多様な属性の中には、時間軸において細かな変遷を遂げるものもあれば、複数型式にわたって連綿と続くものも少なくない。また一つの属性が単一の型式を区分するメルクマールになり得るとは限らず、複数の有力な属性が同時に置換する例も稀である。このような多様性と複雑さが相俟って、亀ヶ岡式

土器の理解を困難なものにしている。従ってそれぞれの属性の消長を跡づけ、属性同士の対応関係や特定器種との結び付きといった規則性を追求することが、型式区分を考える上で重要な検討課題となっている。

3. 山形県内の亀ヶ岡式土器の変遷

亀ヶ岡式土器は前記のように山内氏により6型式に細分されたが、それから30年経ってさらに9細分案が提示された(山内ほか1964)。しかし型式内容の詳細は明示されず、その説明が亀ヶ岡式土器研究の主要課題となってきた。即ち大洞B式がB1とB2式、大洞BC式がBC1式とBC2式、大洞A式がA1式とA2式にそれぞれ2細分されたが、従前の大洞B式がB2式とされ、それ以前がB1式、従前の大洞BC式がBC2式とされ、B2式とBC2式の間を設定されたのがBC1式、従前の大洞A式がA1式とされ、大洞A'式との間を設定されたのがA2式である。膨大な資料が蓄積された昨今の研究情勢は、9細別案を支持する傾向にあるが、山形県内の遺跡でもそれぞれの細分に寄与する成果が得られている。

大洞B式 晩期初頭の型式で、入組三叉文を特徴とする。図8-1~10は大洞B1式で、後期から晩期への過渡的様相を有しており、沈刻による三叉文が発達するが、(口)頸部の文様に縄文地文が残存しており、特に宮の前遺跡で良好な資料が出土している(山形埋文セン1995、山形埋文セン1999)。図8-11~15は大洞B2式で、(口)頸部から縄文地文が消失し、土器の小型化が進行するが、県内では先行型式の資料が充実しているのに対し、同式の僅少さが際立っている。

大洞BC式 晩期前葉の型式で、羊歯状文を特徴とする。図8-16~21は大洞BC1式で、祖型的な羊歯状文が施され、大洞B2式から同BC2式への過渡的様相が看取される。図8-22~40は大洞BC2式で、多様な器種が見られ、羊歯状文が発達するが、三叉状の沈刻文様も残存する(25・40)。口縁部が外折した台付鉢(23)は少数で、直上した平底の鉢形土器(22・24・28)が主体を占める。浅鉢形土器(33・34・36~38)には曲線的な磨消文様が認められるが、ネガ文様の3要素である主要素・副要素・補助要素(高橋1981)は明確になっていない。大洞BC1式の資料はまだ僅少である

が、同BC2式は宮の前遺跡と釜淵C遺跡(山形埋文セン2003)で良好な資料が出土している。

大洞C1式 晩期中葉前半の型式で、曲線的な磨消文様の発達に特徴付けられる。浅鉢形土器(高坏形土器・椀形土器を含む)には、東北北部と共通する複雑な磨消文様が展開している(図8-41~47)が、東北中部固有の器種類型として「縄文施文浅鉢」(52)が指摘される。注口土器では2段構成が消失し、3段構成(53・57)が席捲しており、磨消文様を持つ大型壺形土器(60)は該域固有となっている。同式は古段階(52・53)と新段階に2細分されるが、前者の様相はまだ判然としない。宮の前遺跡と釜淵C遺跡で良好な資料が出土している。

大洞C2式 晩期中葉後半の型式で、平行化過程の磨消縄文に特徴付けられる。浅鉢形土器は小型から大型までバリエーションが豊富で、鉢形土器は「溝底の刺痕」(図9-17)が特徴となる。同式は大きく古段階(図9-1~7・12・18・19・22・25)と新段階(8~11・13・14・16・17・23・24・26)に2細分されるが、それぞれさらに細分することが可能であり、後続型式に盛行する工字文の原形も成立する(10・16・23・24・26)。なお香炉形土器は同式をもって姿を消し、注口土器とのキメラ(18)が現出する。作野遺跡(植松2012)、宮の前遺跡、釜淵C遺跡で良好な資料が出土している。

大洞A式 晩期後葉の型式で、工字文を特徴とし、大洞A1式(図9-27~39)と同A2式(図9-40~49)に細分される。大洞A1式では浅鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が主要な器種となるが、縄文地文が消失する傾向にある。浅鉢形土器では高台付(28~30)が増加し、注口土器は壺形の器形(36)に統一され同式でほぼ消失する。同式は宮の前遺跡と釜淵C遺跡で良好な資料が出土している。

大洞A2式は砂子田遺跡(山形埋文セン2003)と北柳1遺跡(山形埋文セン1997、山形埋文セン2000)で良好な資料が出土し、型式内容が明確になっている。変形匹字文の丸底の浅鉢形土器(40)に代表され、基本的には隆線文手法による匹字文で構成される。浅鉢形土器(台付を含む)、壺形土器、装飾深鉢形土器が主要な器種となるが、粗製深鉢形土器(49)は口頸部が外

折し無文となり、これまで盛行した羽状縄文は姿を消す。大洞A'式 晩期末葉の型式で、変形工字文を特徴とする。文様帯の幅が狭まり、横長扁平の変形工字文で構成され、変形工字文の斜線は直線的で単線が多く、屈曲を持った鉢形土器(図9-50・51・58)が特徴的で、台付浅鉢が盛行する(59~62)。北柳1遺跡4bブロックが良好な纏まりとなっている(山形埋文セン1997)。

4. 大洞貝塚について

岩手県大船渡市に位置する大洞貝塚は、縄文時代晩期の標式遺跡として知られている。同貝塚は大船渡湾奥東岸、岩手県大船渡市赤崎町字大洞に位置する。1925年に発掘調査した長谷部言人氏がその報告(長谷部1925)で、「おおぼら」貝塚として学会で紹介したことから、「おおぼら」という名称が一般に流布してきたが、地元では「おおほら」と呼称されている。また「舞良^{もうりょう}貝塚」の別称が存している。「舞良」は地元の素封家金野家の屋号で、舞良庵という小堂がこの丘陵にあったとの伝説に因んでいる。1925年の調査以前の記録には舞良貝塚の記載が見られることから、長谷部氏報告前は同貝塚名が一般に通用していたと推測されている。

大洞貝塚は標高20~30mの舌状の丘陵地に立地し、A・A'・B・C・D地点の5箇所⁵に点在する貝塚で構成されるが、A・A'・B地点が北の沢筋に臨む北斜面、C・D地点が南の沢筋に臨む南斜面に形成されている(図14・15)。その内A地点とA'地点は比高差約2mの法面で区切られ、法面上位がA地点、その下位がA'地点となっているが、貝層の広がり⁶は連続しており、「固より同一貝塚と見なすべきものである」(長谷部1925:359頁)と指摘されている。なお傾斜地に作られた崖境を地元では「ママ」と呼称しており、以下ではこの法面をママと表すことにする。

A地点とA'地点の貝塚は比高差2mのママで画されているが、ママは後世の切土で、本来は一体の貝塚であった。両地点を合わせた散布範囲は東西33m、南北23mで、面積は約510㎡を測る。貝塚は標高18~23mの北側斜面に形成されており、上段のA地点が標高22~23mの平坦面、下段のA'地点が標高18~20mの緩斜面となる。A地点は貝塚中央部から東側に後期後葉

から大洞B式にかけての貝層、西側は大洞A式の貝層と下部に後期後葉の貝層が検出されており、西側が新しくなる。A'地点も同様に西に向かうに従い新しい文化層が形成されており、貝層は大洞B~C2式に形成され、また西端では大洞A'式の包含土層が認められた。

B地点の貝塚は、A地点の南東方の標高20~24mの北側斜面に形成されており、東西約25m、南北約15mの範囲で貝殻が散布しており、面積は約330㎡を測る。B地点は大洞B~A'式までの貝層が確認され、西側が薄く東方に厚く堆積しており、埋葬人骨が7体(1925・1960年調査)検出されている。

C地点の貝塚は、大洞丘陵の標高17m前後の南側斜面に形成されており、散布範囲は東西約40m、南北約15mで、面積は約480㎡を測る。C地点は、大洞C1・C2式の貝層が検出され、特に同C2式土器が多く出土しており、骨角器類が豊富に出土し、人骨も4体検出されている。

D地点の貝塚は、標高20.5~22.5mの南側斜面に形成されている。早稲田大学が1958年に作成した測量図に貝層の広がり⁷が記録されており、1960年にD地点として慶応義塾大学が発掘調査を実施しほぼ完掘されている。大船渡市教育委員会のボーリング調査では、貝層の散布範囲は東西約20m、南北約10mで、面積は約170㎡を測り、大洞貝塚の中では最も小規模となる。後期後葉から大洞B式にかけて貝層が形成されており、炉跡遺構や埋葬人骨、埋葬犬骨が検出されている。

大洞貝塚は、縄文時代後期後葉から晩期全般にわたって形成された地点貝塚である。同じ時期に営まれた大船渡湾周辺の有力な貝塚として、長谷堂貝塚・富沢貝塚・下船渡貝塚、湾口東側に宮野貝塚が位置している(図12)。これらは近似した生態系に属し、大船渡湾という地理的単位において同時期に並存した遺跡群として捉えられ、陸路または海路を通じて緊密な関係にあったと推定される。また南方に隣接した広田湾では中沢浜貝塚と瀬沢貝塚、更には気仙沼湾に田柄貝塚が位置しており、いずれも時期的に大洞貝塚と並行し、埋葬人骨の検出や豊富な骨角器類の出土といった共通項を有している。自然環境や地域社会を考慮に入れた領域分析を通して、遺跡群内から遺跡群間、更には文化圏へと範囲を広げた組織的研究が求められるが、それには個々の遺跡の遺物・

遺構の徹底した考察が基本となろう。大洞貝塚のこれまでの調査資料の公表が待たれるところである。

引用文献

小林圭一 2001 「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号(通巻31号) pp.21-81 山形考古学会
 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究—東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式—』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究—青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について—」『北奥古代文化』第12号 pp.1-51 北奥古代文化研究会
 高橋龍三郎 1999 「東北地方 晩期(亀ヶ岡式)」『縄

文時代』10(第1分冊) pp.178-196 縄文時代文化研究会

長谷部言人 1925b 「陸前大洞貝塚(發掘)調査所見」『人類學雜誌』第40巻第10号 pp.349-360 日本人類學會
 長谷部言人 1929 『先史學研究』山岡書店
 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 pp.1-10 (pp.139-157) 東京考古学会(1967年7月刊『山内清男・先史考古学論集・第三冊』pp.113-132 先史考古学会)
 山内清男・甲野勇・江坂輝彌編 1964 『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社

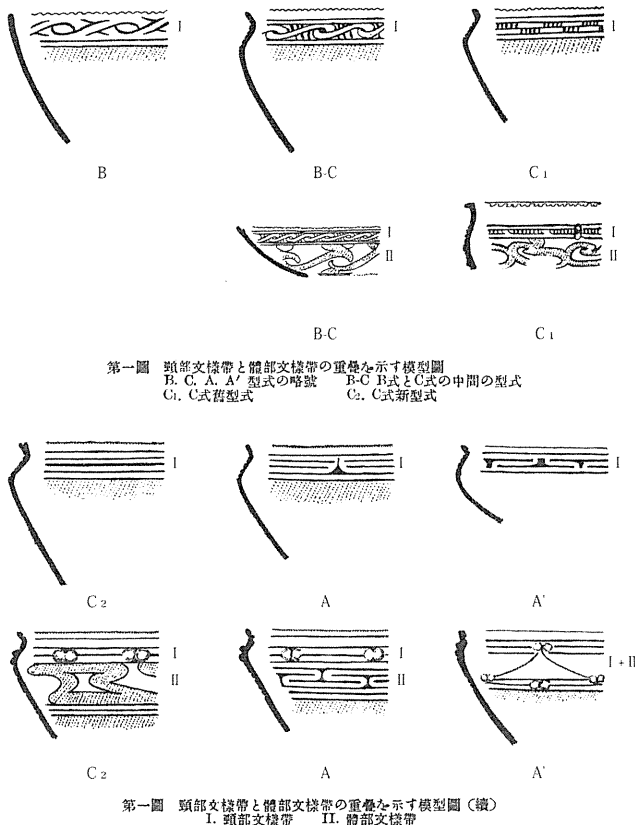


図1 頸部文様帯と體部文様帯の重疊を示す模型圖(山内1930)

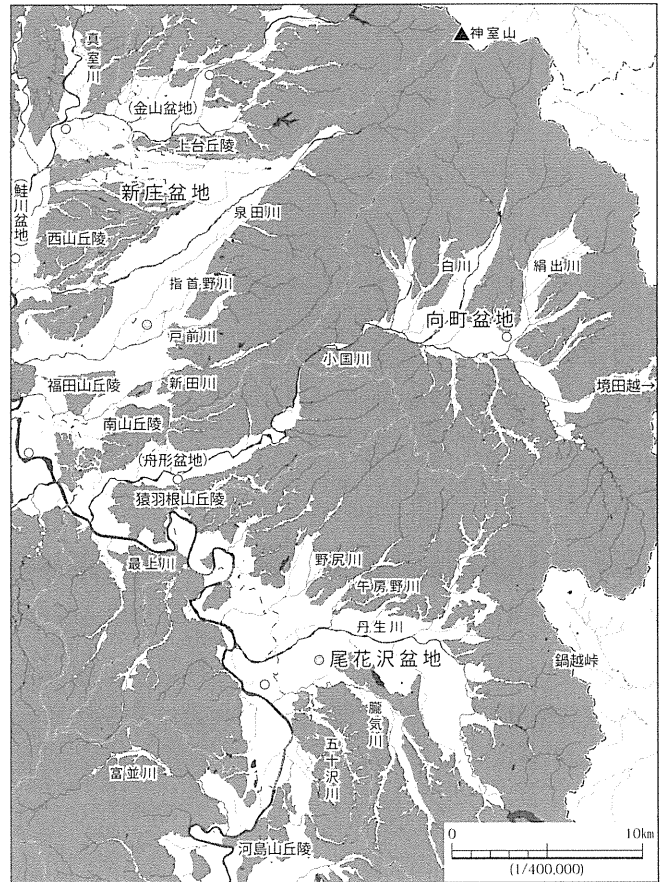


図2 山形県北東部の地形区分

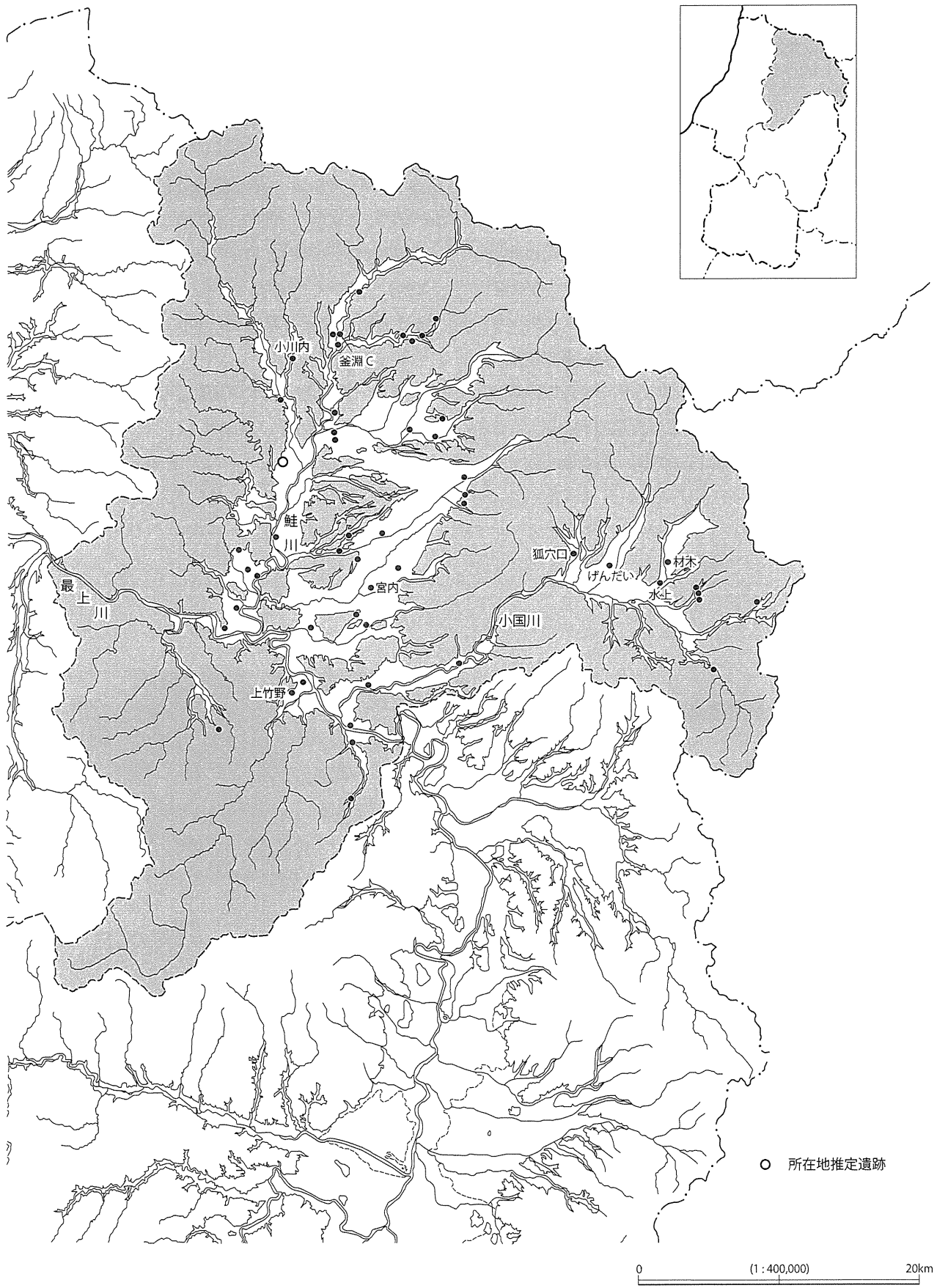


図3 最上地方の縄文時代晩期遺跡分布図

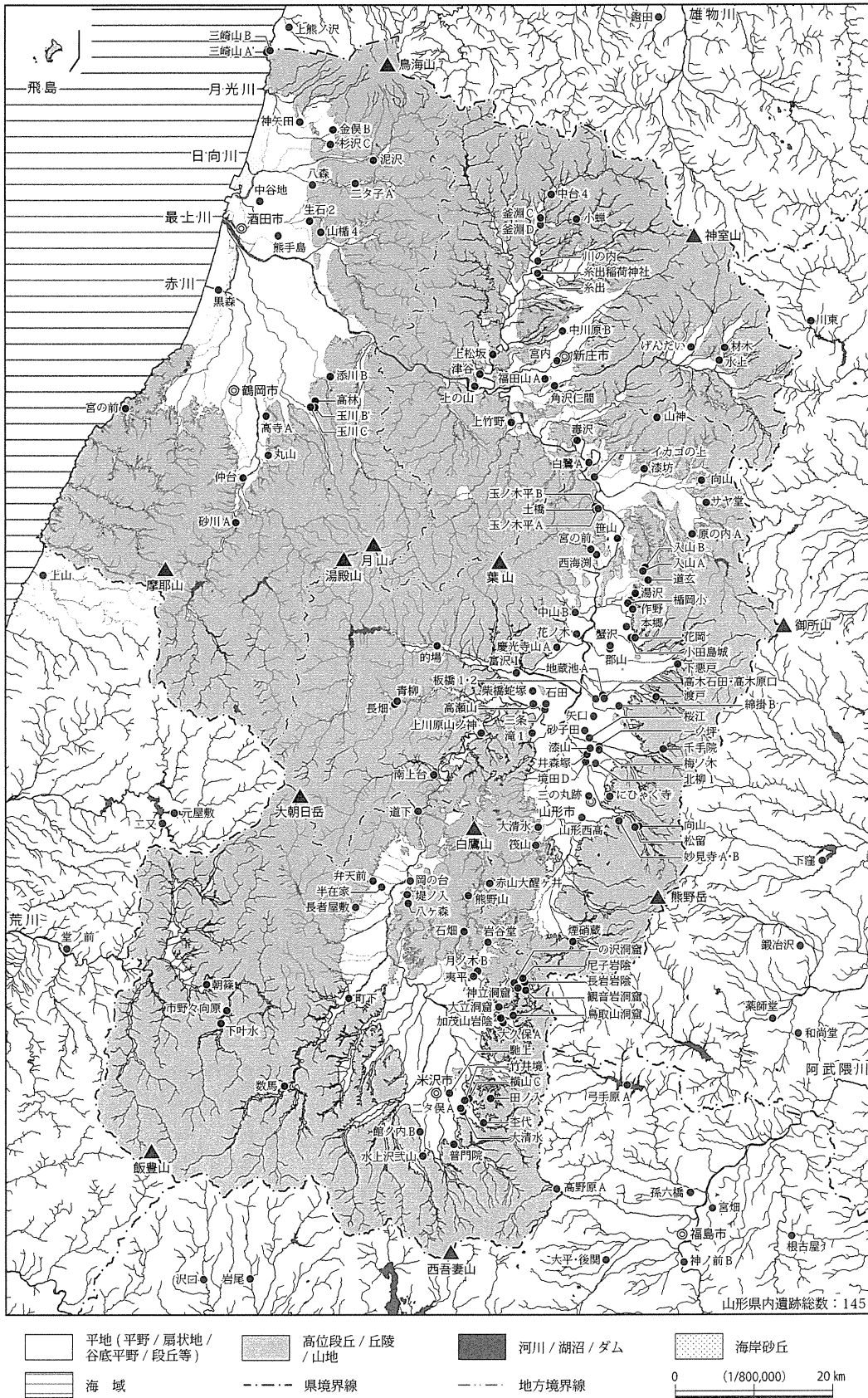


図5 山形県内における縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前葉（大洞A式～鱸沼式）の遺跡分布図

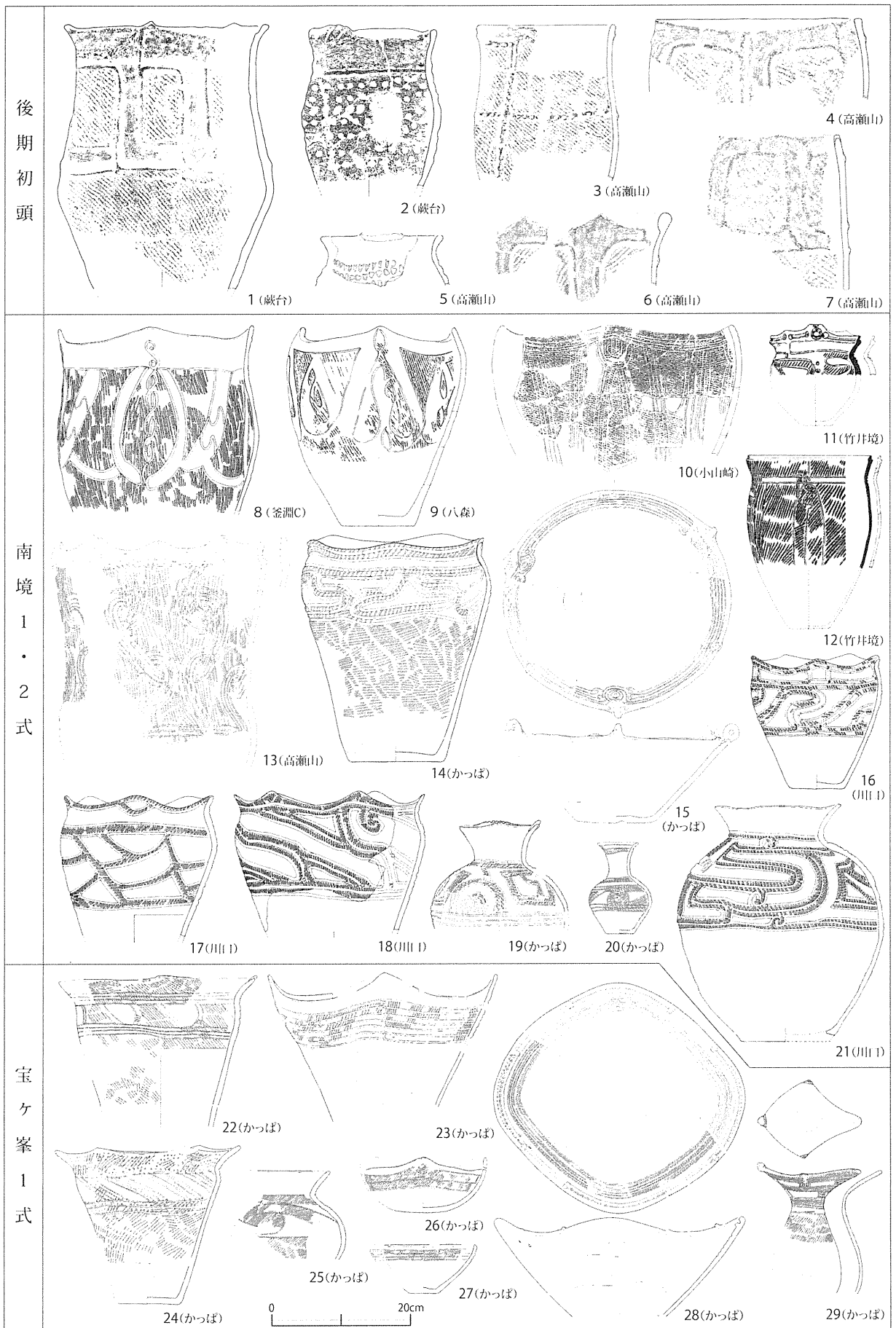


図6 山形県内縄文後・晩期土器変遷図(1)

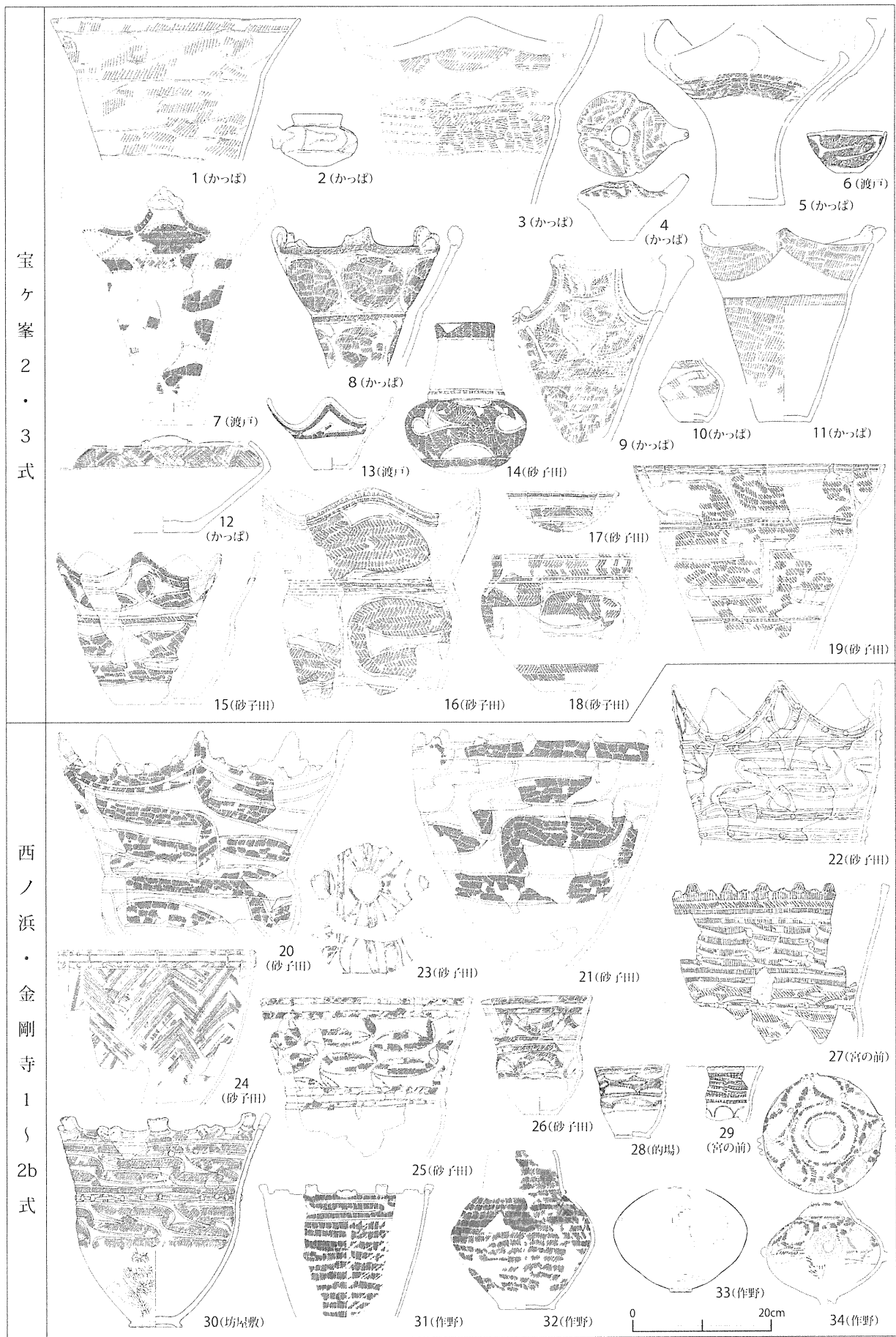


図7 山形県内縄文後・晩期土器変遷図(2)

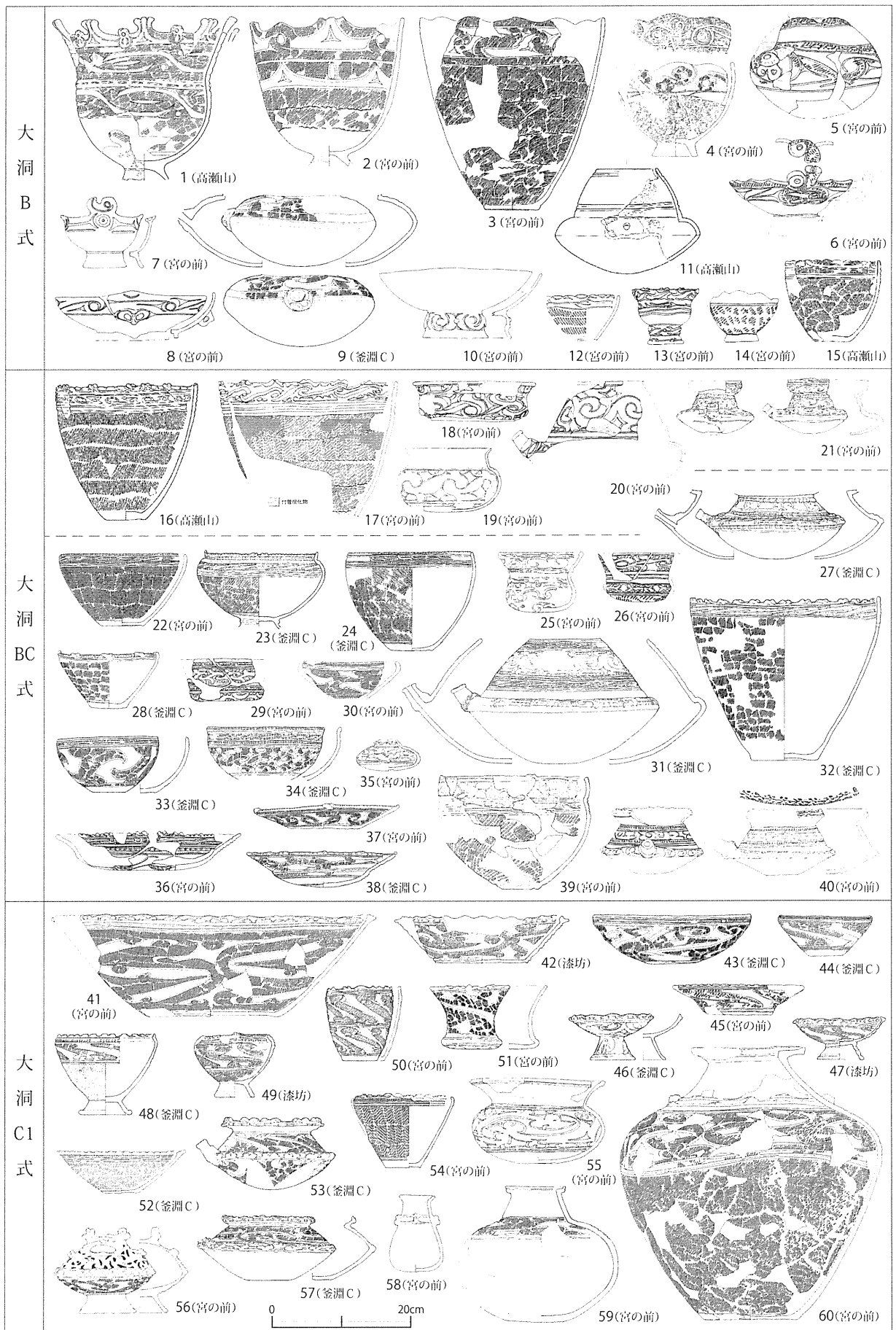


図8 山形県内縄文後・晩期土器変遷図(3)

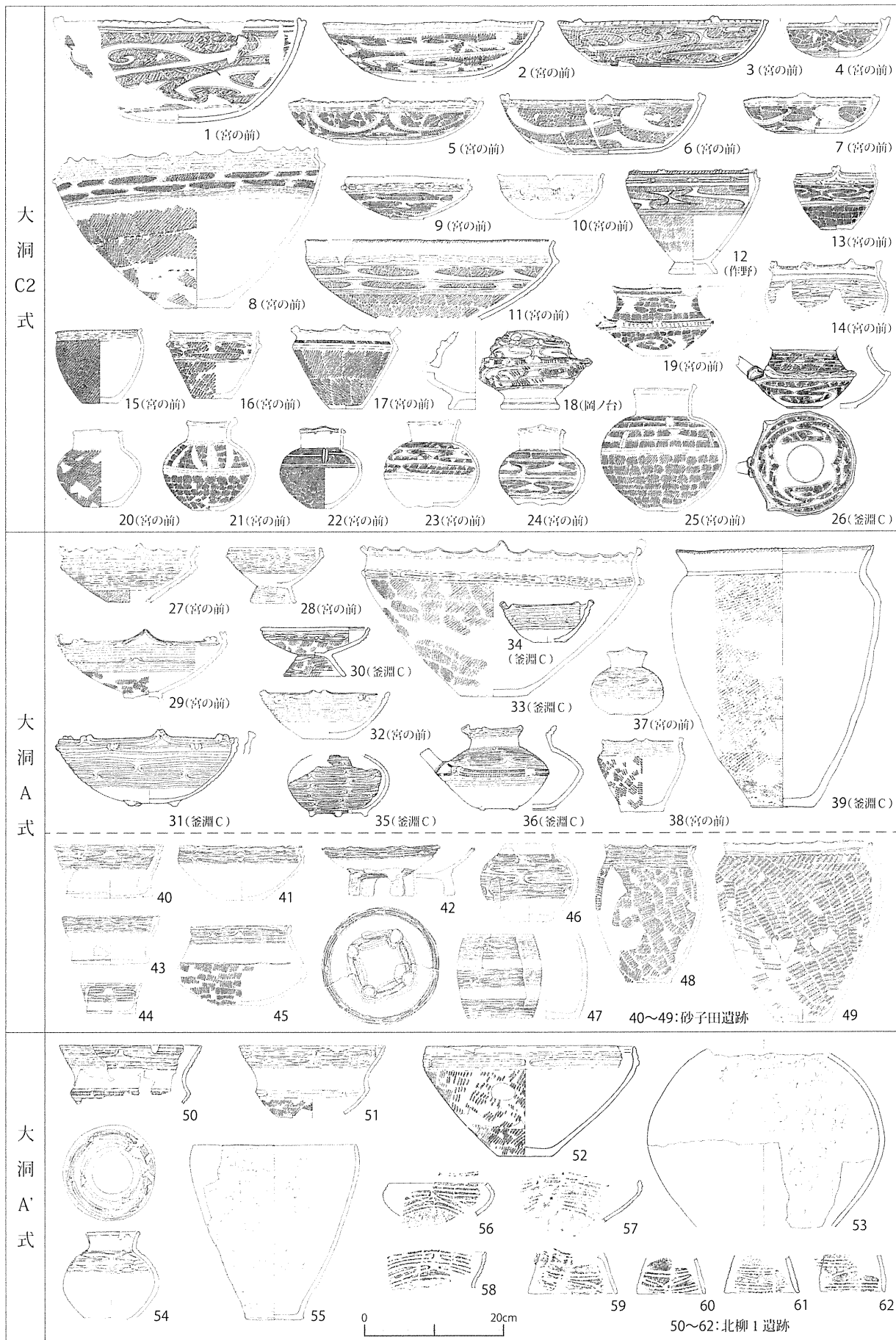


図9 山形県内縄文後・晩期土器変遷図(4)

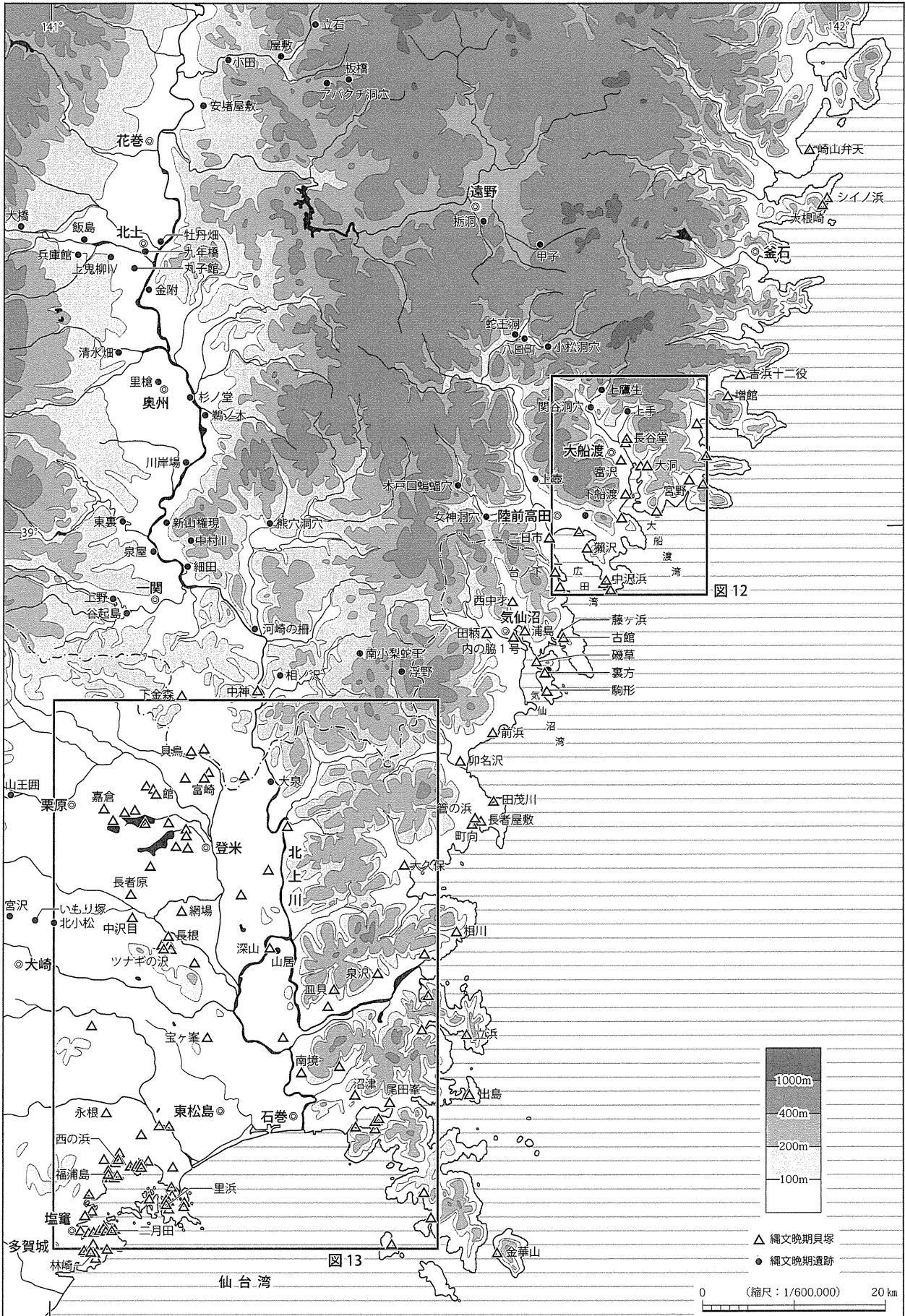


図 11 東北中部太平洋沿岸地域の縄文時代晩期の貝塚と主要遺跡 (縮尺: 1/600,000)

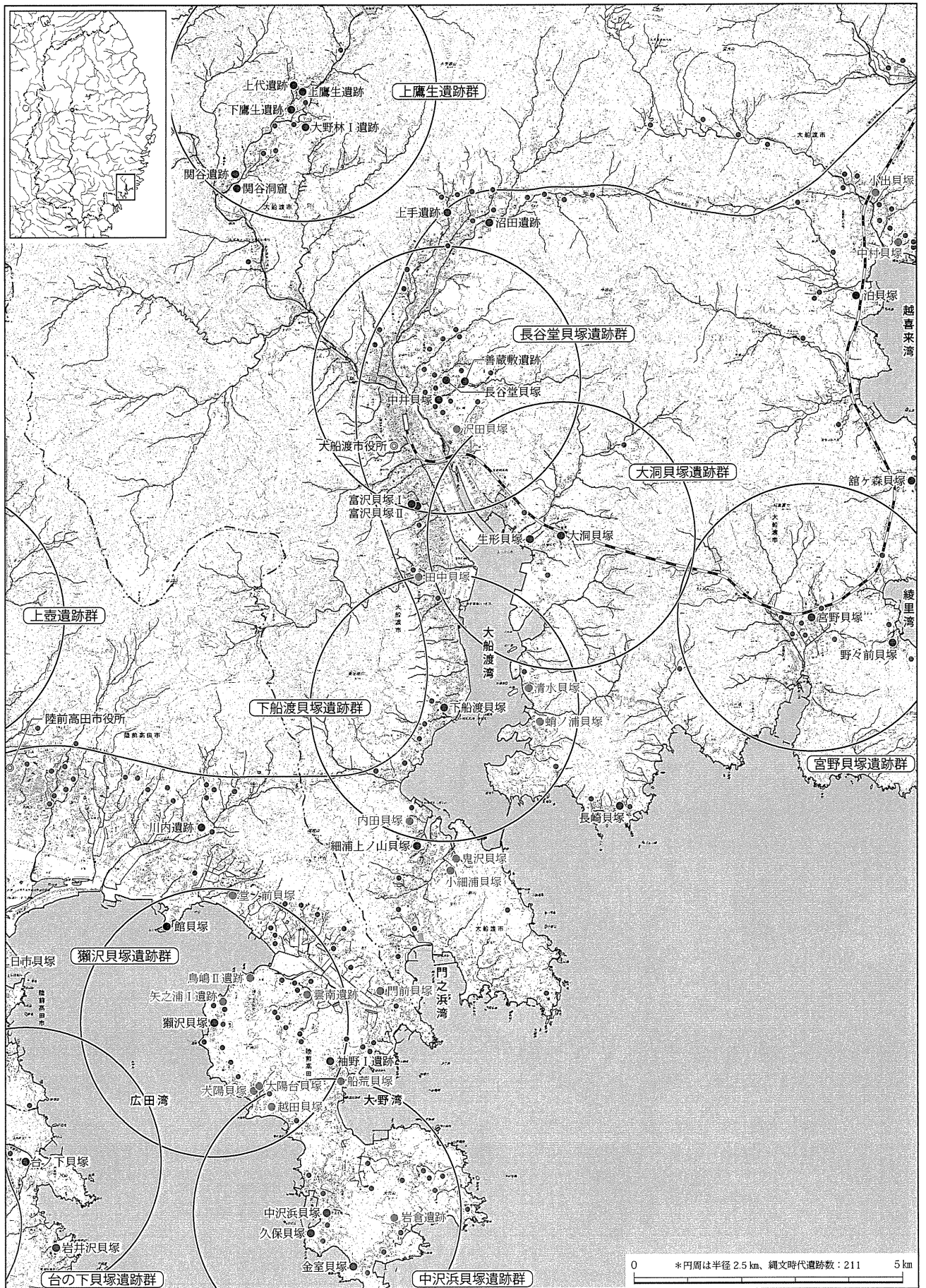


図12 大船渡湾周辺における縄文時代晩期の遺跡分布 (縮尺:1/100,000)

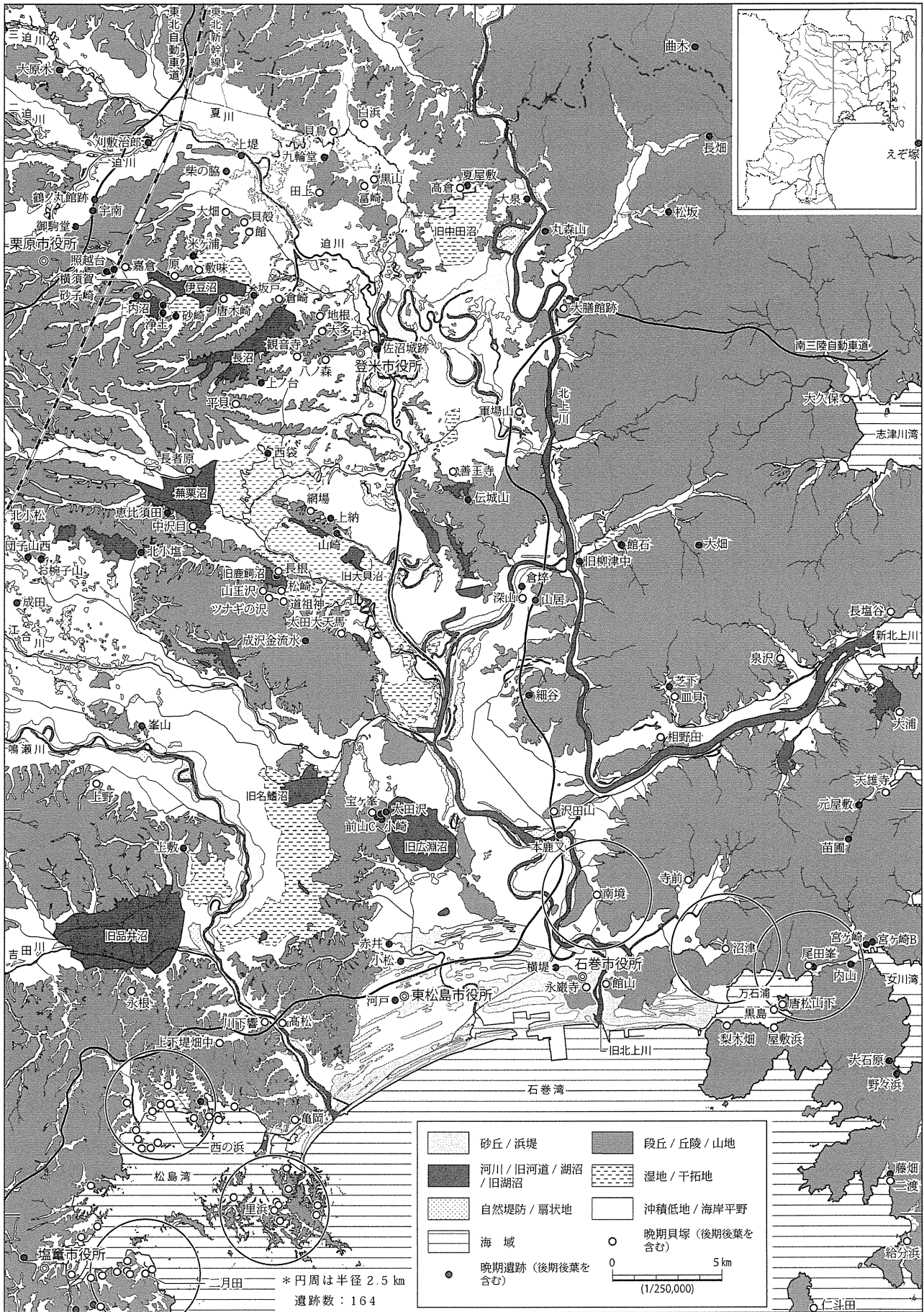


図 13 北上川下流域及びその周辺地域の地形分類と縄文晩期の遺跡分布 (1/250,000)

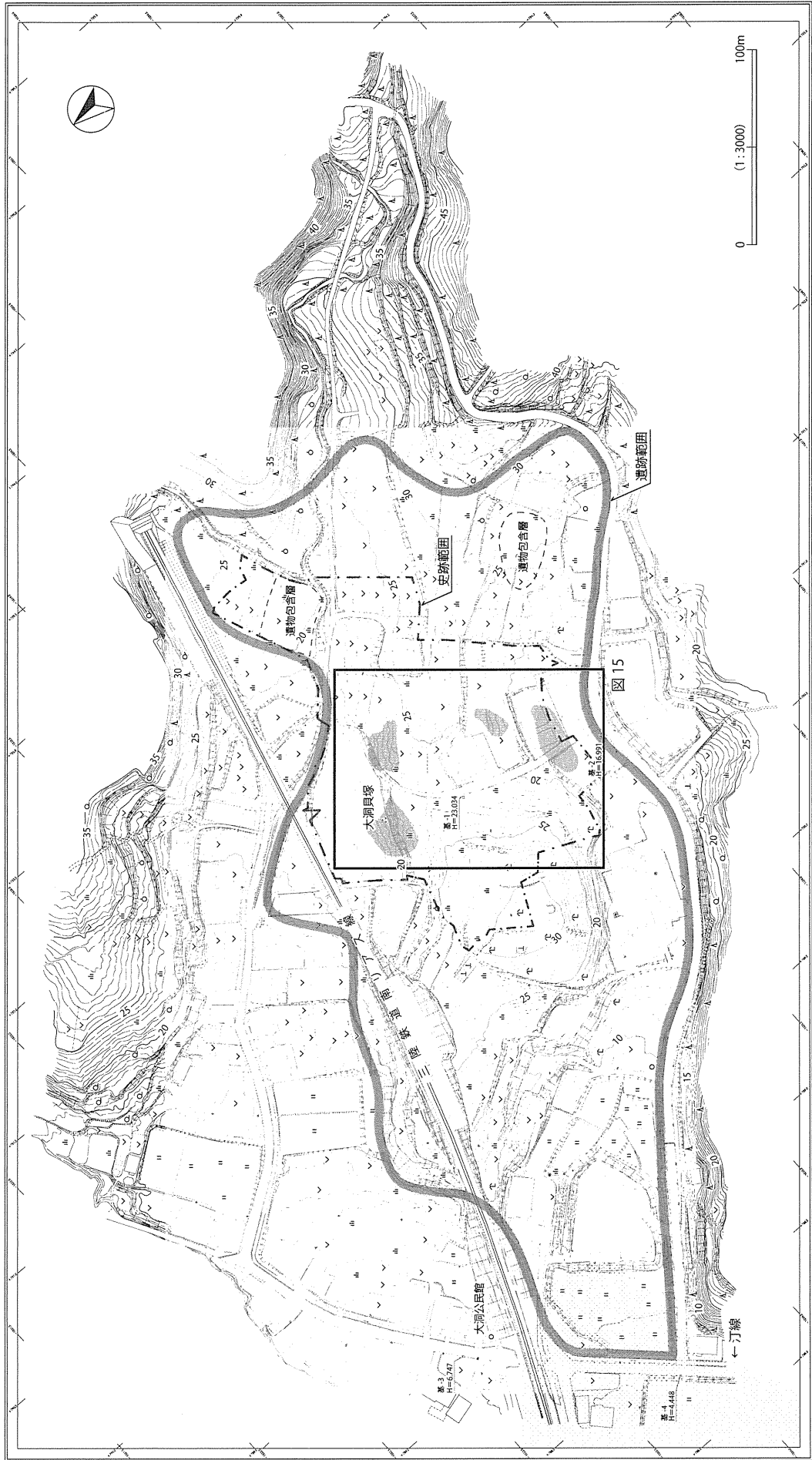
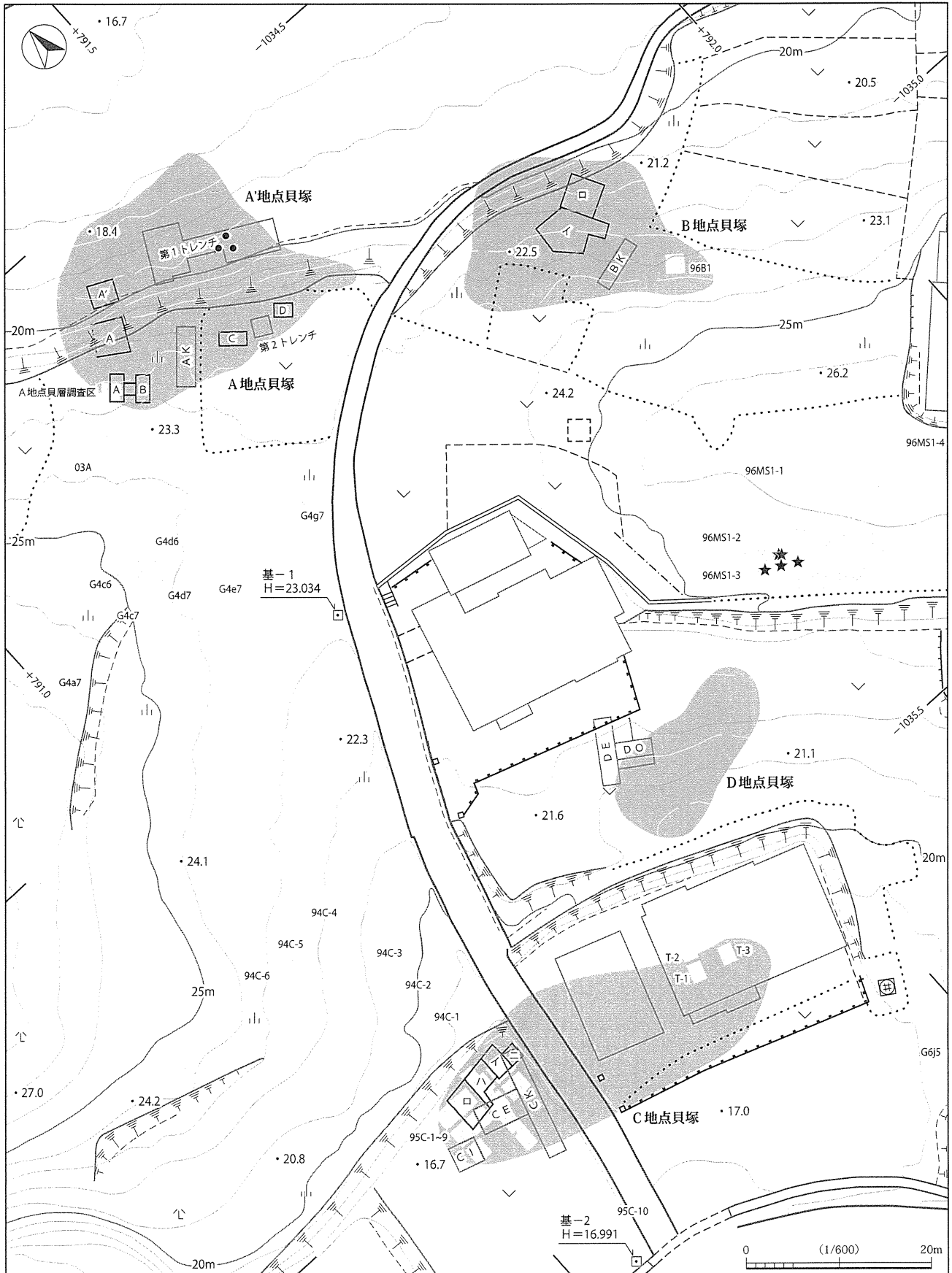


図14 岩手県大船渡市大洞貝塚全体図(金野ほか2004)改変



★ 人骨出土地点

図 15 岩手県大船渡市大洞貝塚トレンチ配置図 (縮尺: 1/600)

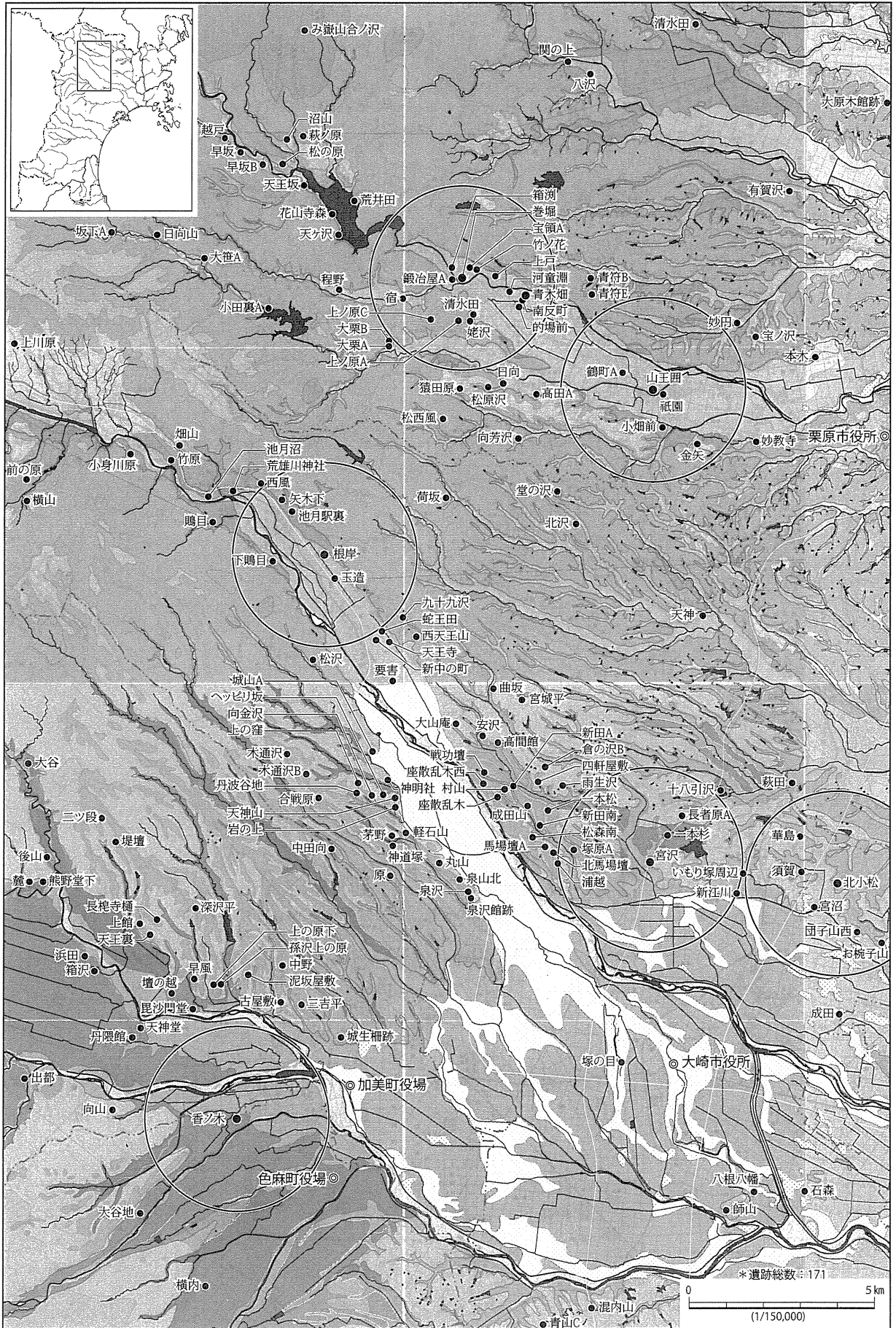


図 16 宮城県北西部の縄文時代晩期の遺跡分布図 (1/150,000)

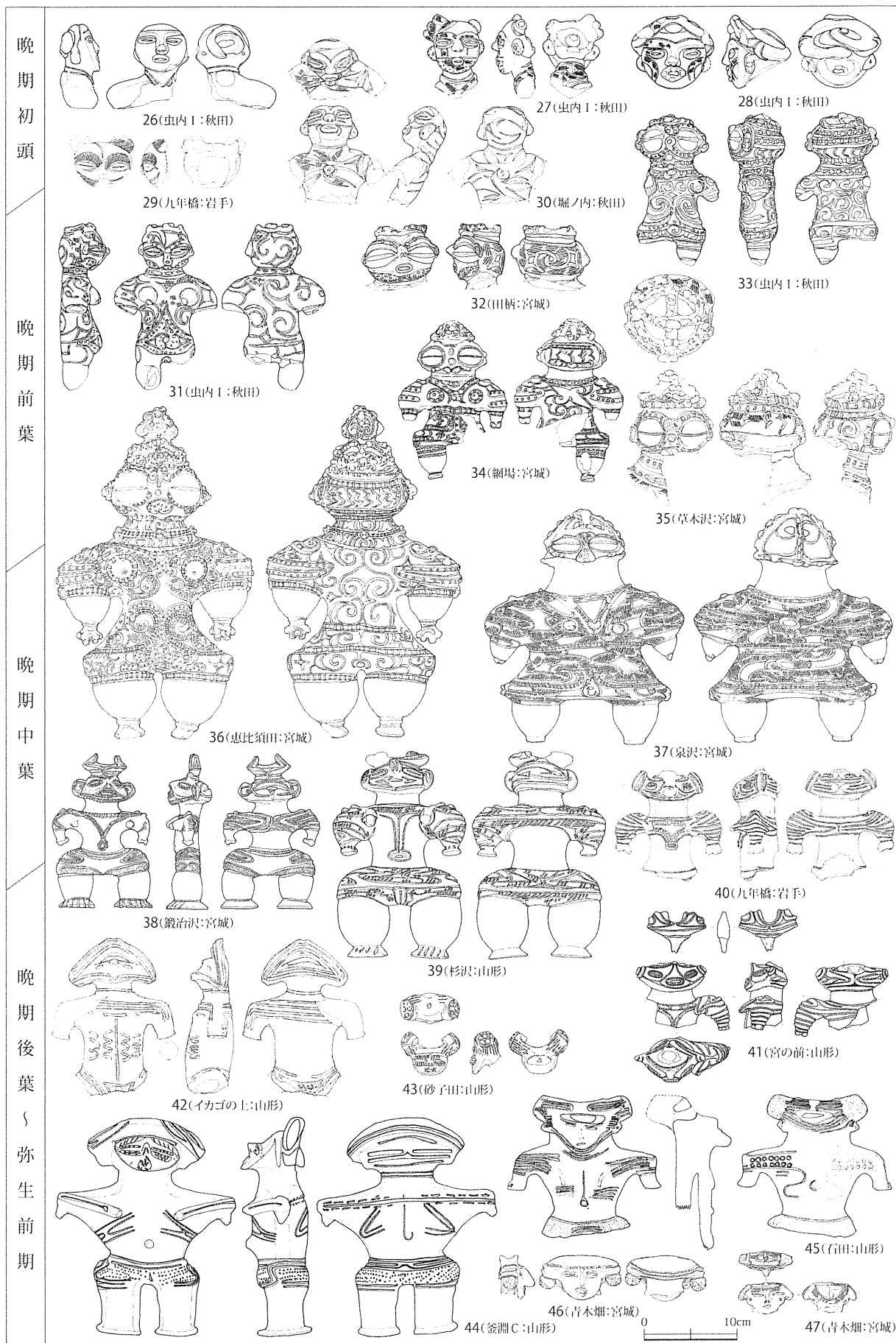


図17 東北中部出土の縄文時代晩期の土偶（弥生前期を含む）

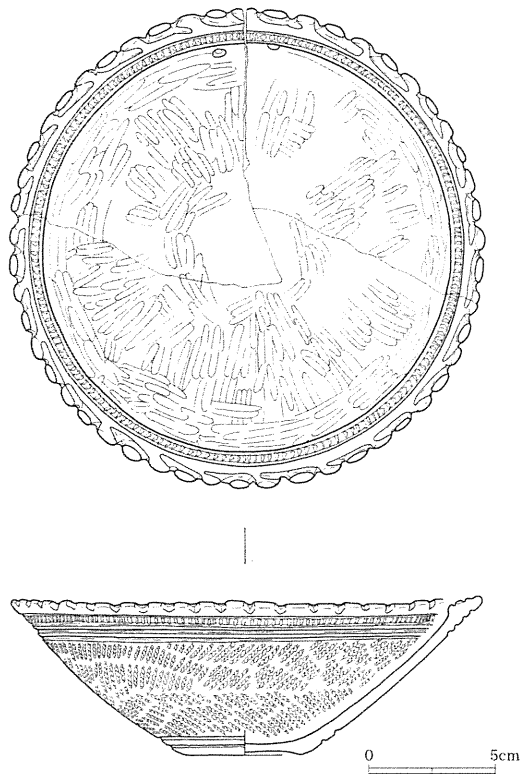


図 228 山形県釜淵 C 遺跡出土の「縄文施文浅鉢 1 類」

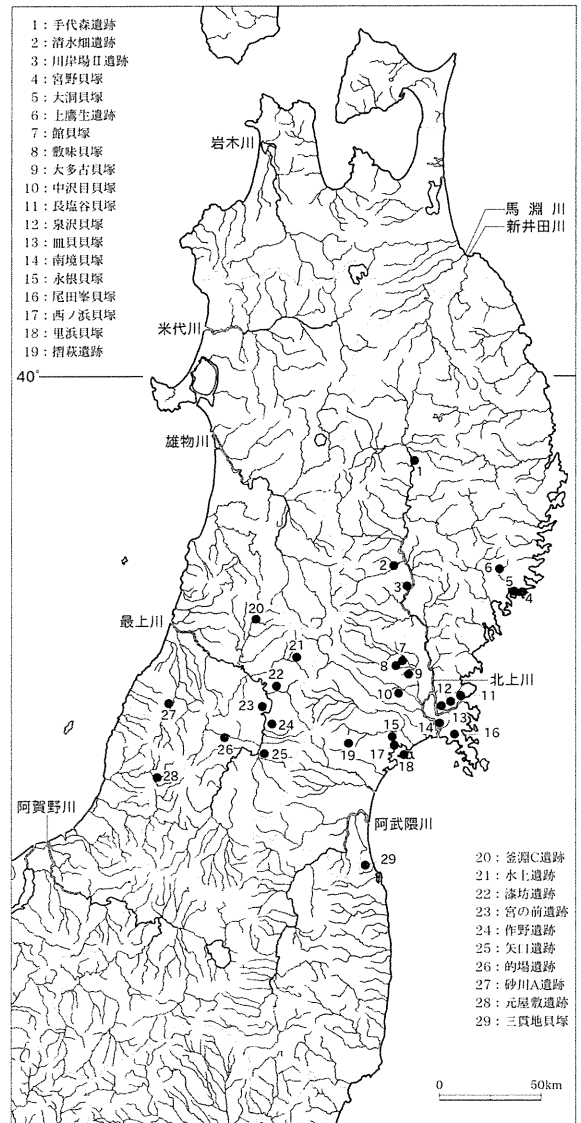
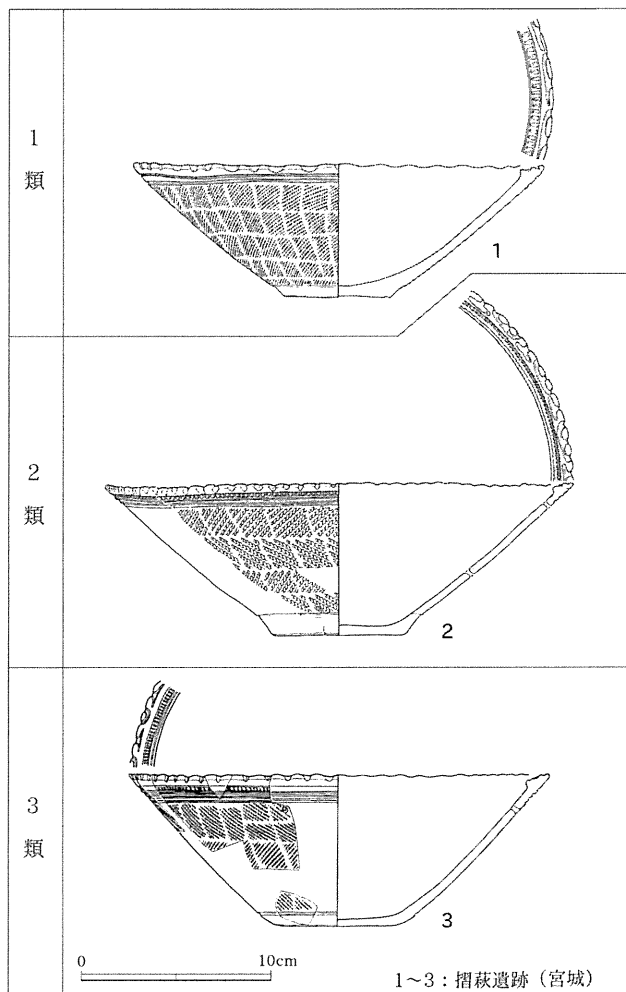


図 230 「縄文施文浅鉢」を出土した遺跡

図 229 「縄文施文浅鉢」の分類

図 18 東北中部に特徴的な「縄文施文浅鉢」大洞 C1 古式

表1 山内清男氏による縄文土器型式編年表 (山内 1937) 一部改変

縄文土器型式の大別と細別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 " 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕畑		黒島 ×	戦場ヶ谷 ×
前期	石川野 × (+)	円筒土器 下層式 (4型式以上)	室浜 大木 1 " 2a,b " 3-5 " 6	蓮田式 { 花積下 関山 黒浜 諸磯 a,b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	鉦ノ木 ×	国府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟?
中期	(+) (+)	円筒上 a " b (+) (+)	大木 7a " 7b " 8a,b " 9,10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利 E " (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 } ?
後期	青柳町 × (+) (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晚期	(+)	亀ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " C 1,2 " A,A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " × 保美 ×	宮滝 × 日下 × 竹ノ内 × 宮滝 ×	津雲下層	御領

註記 1. この表は仮製のものであって、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と関聯する土器を出した遺跡名。

表2 山内清男による大洞諸型式の分類基準 (高橋1999)改変

器種と属性 型式細分		鉢形				壺形	急須形		香炉形
		突起	口縁	頸部	体部文様	口縁	形態	頸部文様	形態
山内 (1930)	山内 (1964)	B突起 B形突起列 A突起	薄い口縁 厚い口縁 口上端の溝 口内側の溝 口内側溝からの枝 口外側溝からの枝	頸部文様帯直上の文様 羊歯状文 截痕 細かい点列 二溝間の截痕 溝底の刺痕 肩部の隆線	曲線的磨消文様 平行化過程の磨消文様 並行線の文様 磨消縄文	口外側の隆帯 口唇上沈線	肩の区画 肩の帯状隆帯 平底化 丸底 平底 体部が無文壺形	沈線 羊歯状文 磨消縄文	肩の隆帯化 肩の区画
	B1								
	B2								
	BC1								
	BC2								
	C1								
	C2								
	A1								
	A2								
	A'								

表3 縄文時代後期後葉～弥生時代前期土器編年表

推定年代 14C BP	九州	山陰	瀬戸内 (四国含む)	近畿	東海西部 (愛知・遠江)	東海西部 (駿河)	北陸	中部高地	関東	新潟 (上越)	新潟 (中下越)	東北	北海道 (渡島半島)	
縄文後期	3500 } 3400	「原田遺跡2区」	福田KⅢ式	元住古山Ⅱ～ 宮滝Ⅰ式	長谷式	蛭田式	井口Ⅰ式	高井東式	高井東式・ 曾谷式	龍峰 後期Ⅳ期	元屋敷 7期	痛付土器Ⅰ段階	堂林式(古中)	
	3400 } 3200	(+)	福田KⅢ式～ 岩田第三類	宮滝 2式	馬見塚KⅠ式・ 吉胡KⅠ式	蛭田式/ 清水天王山下層1	井口Ⅱ式	高井東式・ (石神J94号住居)	高井東式・ 安行Ⅰ式	龍峰 後期Ⅴ期	元屋敷 8期	痛付土器Ⅱ段階	堂林式(新)	
縄文晩期	3100 } 3000	(+)	(+)	滋賀里Ⅰ式	寺津下層式・ 伊川津Ⅰ式	清水天王山下層1	八日市新保Ⅰ式	「中ノ沢式」・ (後平2号住居)	安行Ⅱ式(古)	龍峰 後期Ⅵ期	元屋敷 9期	痛付土器Ⅲ段階	湯の里Ⅲ式	
	3200 } 3100	「原田遺跡2区」	岩田第四類	滋賀里Ⅰ～Ⅱ式	(+)	清水天王山下層2	八日市新保Ⅱ式	「中ノ沢式」・ (大花2号住居)・ 清水天王山下層2	安行Ⅱ式(新)	龍峰 後期Ⅶ期	元屋敷 10期	痛付土器Ⅳ段階	御殿山式	
	3100 } 3000	「板屋Ⅲ遺跡 旧河道」	(+)	滋賀里Ⅲa式	下別所式・ 伊川津Ⅱ式	清水天王山中層1	御経塚式(古) ・勝木原式	御経塚式(古) ・勝木原式	安行3a式(古)	(正面・原A遺跡 2号住居)	大洞BⅠ式	大洞BⅠ式	東山Ⅰa式	
	3000 } 2900	(原田遺跡1区 Ⅱ群2類)	(+)	滋賀里Ⅲa～ 籾原式(古中)	寺津式・ 吉胡BⅠ式	清水天王山中層	御経塚式(中) ・勝木原式	御経塚式(中) ・勝木原式	安行3a式(新)	(正面・原A遺跡 L5-1号土坑)	大洞BⅡ式	大洞BⅡ式	大洞BⅡ式	東山Ⅰb式
	2900 } 2800	「神原Ⅱ遺跡」	谷尻式	舟津原式	籾Ⅱ式・ 保美Ⅱ式	清水天王山中層2	御経塚式(新) /中屋式(古)	御経塚式(新) /中屋式(古)	天神原式(古)・ 安行3b式・ 姫山Ⅱ式	佐野Ⅰa式	大洞BC式	大洞BC式	大洞BC式	上ノ国式(古)
	2800 } 2700	「江辻SX1」 ・千河原段階	前池式	前池式	籾原式(新)	後井式・ 福前山式	清水天王山上層	中屋式(新)	佐野Ⅰb式・ 清水天王山上層	天神原式(新)・ 安行3c式・ 前浦Ⅰ式	朝日式・ 大洞CⅠ式	朝日式・ 大洞CⅠ式	大洞CⅠ式	上ノ国式(新)
	2700 } 2600	「桂見Ⅰ式」	「桂見Ⅰ式」	前池式	滋賀里Ⅳ式	西之山式	(+)	下野式(古)	佐野Ⅱ式(古中)	安行3d式・ 前浦2式	朝日式	朝日式	大洞C2式(古)	(+)
	2700 } 2600	「桂見Ⅱ式」	津島岡大式	津島岡大式	口酒井式	五貫森式(古)	(雌鹿塚遺跡)	下野式(新)	佐野Ⅱ式(新)	安行3d式・ 前浦2式	上野原式	上野原式	大洞C2式(新)	聖山Ⅰ群
	2700 } 2600	古市河原田式	沢田式	沢田式	船橋式	五貫森式(新)	「関屋塚式」	長竹式(古)	女鳥羽川式	桂台式・ 向台Ⅱ式	鳥屋Ⅰ式	鳥屋Ⅰ式	大洞A式(古)	聖山Ⅱ群
	2600 } 2500	古溝式	津島式	津島式	長原式/ 第Ⅰ様式(古)	馬見塚式		長竹式(新)	離山式・ 氷Ⅰ式(古)	杉田Ⅲ式・ 千綱式	離山式・ 氷Ⅰ式(古)	鳥屋2a式	大洞A式(新)	湯の里Ⅴc類
2500 } 2400	「前期2式」	高尾式	高尾式	第Ⅰ様式(中)	榎王式	(駿河山王遺跡)	柴山村式(古)	氷Ⅰ式(中)	杉田Ⅲ式・千綱式 /荒海式	氷Ⅰ式(中)	鳥屋2b式	大洞A'式	尾白内Ⅰ群	
2400 } 2300	「前期3式」	門田式	門田式	第Ⅰ様式(新)	水神平式	(駿河山王遺跡)	柴山村式(新)	氷Ⅱ式	(鏡木)・荒海式 ・沖Ⅱ式	氷Ⅱ式	結立式	青水畑式 ・砂沢式	尾白内Ⅱ群	

小林圭一・中沢道彦 2017年5月作成

表4 早稲田・慶応大学による大船渡湾周辺貝塚の調査歴

調査年月	貝塚名	調査大学	調査参加者
1952年 7月	清水貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・東登 ほか
1954年 7月	門前貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・東登・吉田義昭 ほか
1955年 8月	清水貝塚	早稲田大学	西村正衛・直良信夫・菊池義次・金子浩昌・杉山荘平・東登 ほか
1955年 11月	長谷堂貝塚	早稲田大学	西村正衛・菊池義次・金子浩昌 ほか
1956年 4月	大洞貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・可兒弘明・東登・吉田義昭 ほか
1957年 8月	蛸ノ浦貝塚	早稲田大学	西村正衛・滝口 宏・菊池義次・金子浩昌・和田 哲・東登・鈴木尚 ほか
1958年 10月	大洞貝塚	早稲田大学	西村正衛・金子浩昌・中村恵次・和田 哲 ほか
1960年 8～9月	大洞貝塚	慶応義塾大学	清水潤三・江坂輝彌・笹津備洋・近森 正・鈴木公雄・渡辺 誠・赤澤 威・高山 純 ほか
1961年 7～8月	下船渡貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・草間俊一・笹津備洋・東登・吉田義昭 ほか

表5 大洞貝塚の調査歴一覧

調査年月	調査地点	調査主体	調査参加者	文献
1925年 4月	A・C地点	東北帝国大学	山内清男・小田島祿郎	長谷部 1925b
1925年 8～9月	A・A'・B・C地点	東北帝国大学	長谷部言人・小金井良精・大山 柏・八幡一郎 池上啓介・小田島祿郎	長谷部 1925b
1935年 9月	A・B地点		角田文衛	角田 1935
1951年 6月	A・A' 地点境界		東 登・菊池啓治郎	大船渡市教委 2000
1956年 4月	A・A' 地点	慶応義塾大学	江坂輝彌・可兒弘明・東登・吉田義昭 ほか	江坂 1956
1958年 10月	A地点	早稲田大学	西村正衛・金子浩昌・中村恵次・和田 哲 ほか	西村 1962
1960年 8～9月	A・B・C・D地点	慶応義塾大学	清水潤三・江坂輝彌・笹津備洋・近森 正・鈴木公雄・渡辺 誠・赤澤 威・高山 純 ほか	清水 1965
1966年 3月	県史跡に指定 (対象面積: 3,310 m ²)			
1994・95年	C地点	大船渡市教委	金野良一・及川 洵 ほか	大船渡市教委 1997
1996～98年	B地点	大船渡市教委	金野良一・及川 洵 ほか	大船渡市教委 2000
2001年 8月	国史跡に指定 (対象面積: 20,434 m ²)			
2001～03年	A地点	大船渡市教委	及川 洵・金野良一・氷見淳哉 ほか	大船渡市教委 2004

表6 大洞貝塚地点別の貝層形成時期

時期 地点	後期中葉	後期後葉	大洞 B 式	大洞 BC 式	大洞 C1 式	大洞 C2 式	大洞 A 式	大洞 A' 式
A 地点	---	■	---	---	(?)	---	■	(?)
A' 地点	(?)	---	■	■	■	■	(?)	---
B 地点	---	---	■	(?)	(?)	■	■	■
C 地点	---	---	---	---	■	■	---	---
D 地点	---	■	■	---	---	---	---	---

■ 貝層形成 - - - - - 包含層形成

最上地域の縄文時代晩期の遺構と遺物



上竹野遺跡の再葬墓



小林圭一
(山形県埋蔵文化財センター)
2022年10月9日
釜淵C遺跡出土の結髪土偶

1



大木7b式主体 (大木8a式を含む: 国重要文化財)
最上町水木田遺跡出土の深鉢形土器

2



中川原C遺跡出土の土偶



西ノ前型土偶: 有脚立像で長脚・出尻形を特徴

3



かっぱ遺跡出土土宝ヶ峯1式

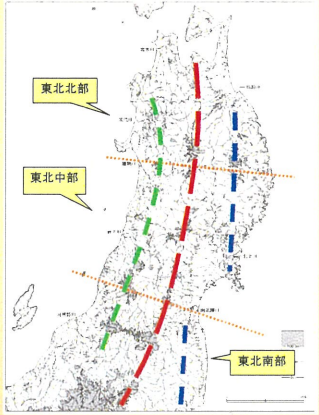


かっぱ遺跡出土土宝ヶ峯2式

4

東北地方の地域区分

- ① 東北地方の地形
3列の山並みが並走
奥羽脊梁山脈
北上山地・阿武隈高地
出羽山地
- ② 盆地列の形成
- ③ 東北部/中部/南部
北部と中部の境界
北緯40度ライン
中部と南部の境界
阿武隈川下流域(宮城県)
最上川上流域(山形県)



5

山形県の地形区分図・最上川流域の地形分類概念図


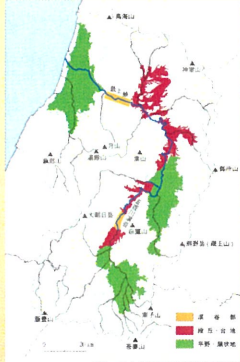
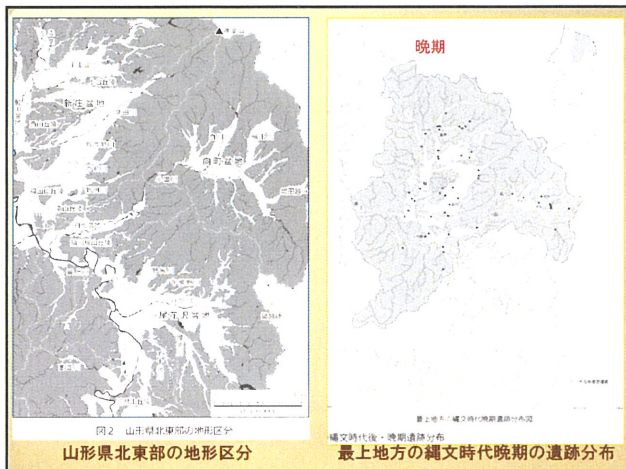
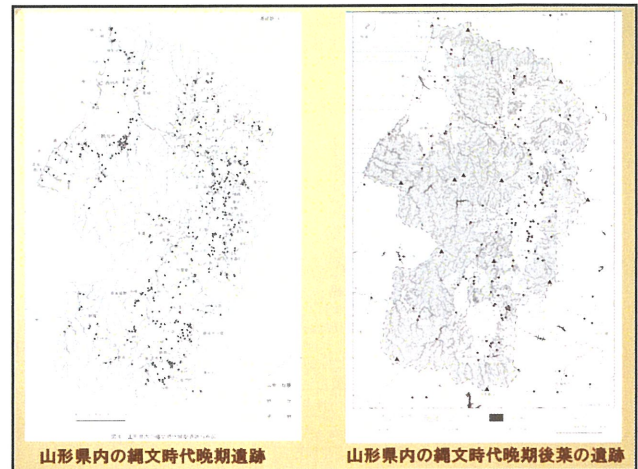



図1 山形県の地形区分図
図2 最上川流域の地形分類概念図

6



7



8

山形県内の縄文遺跡の推移 (2010年3月現在)

- 山形県内登録遺跡数 : 5,103 遺跡
- 山形県内の縄文遺跡数 : 2,295 遺跡
 - 草創期 : 10 遺跡程度
 - 早期 : 100 遺跡程度
 - 前期 : 171 遺跡
 - 中期 : 1,120 遺跡
 - 後期 : 449 遺跡
 - 晩期 : 477 遺跡
- 中期に遺跡数のピークがある。
- 細かな型式でみると変動の幅が著しい。

9

縄文時代の年代

- 草創期 : 15,860—11,345 年前 (4,515 年間)
- 早期 : 11,345—7,050 年前 (4,295 年間)
- 前期 : 7,050—5,415 年前 (1,480 年間)
- 中期 : 5,415—4,490 年前 (925 年間)
- 後期 : 4,490—3,220 年前 (1,270 年間)
- 晩期 : 3,220—2,385 年前 (835 年間)

10

縄文時代の年代の決め方について

- 1 万年間以上の期間続いた。
- 土器は一貫して作られ、使用されてきた。
- 形態や装飾は変化に富む。
- 土器が年代差と地域差の単位。
- 形態や装飾の特徴に着目して一定のまとまりを抽出→**土器型式**。
- 土器型式を地域ごとに時間軸に沿って配列→**編年表**。
- 東北地方の晩期は亀ヶ岡式土器と総称→岩手県大船渡市大洞貝塚 (1925 年調査) の成果により、6 型式に細分。

11

縄文土器の新旧の決め方

- 型式学的分類に基づいて、時間経過を示すとみられる**型式連続**にまとめる。
 - 時間的な経過とともに変化する属性を見出し、土器型式を時系列に沿って配列する作業。
- 次いで層位学などの証拠に基づいてその連続の新旧の方向を決定する。
 - 層位堆積の原則 (下に堆積した土層の方が上に堆積した土層より古い) に基づいて確かめる作業で、発掘調査による手続き。

12

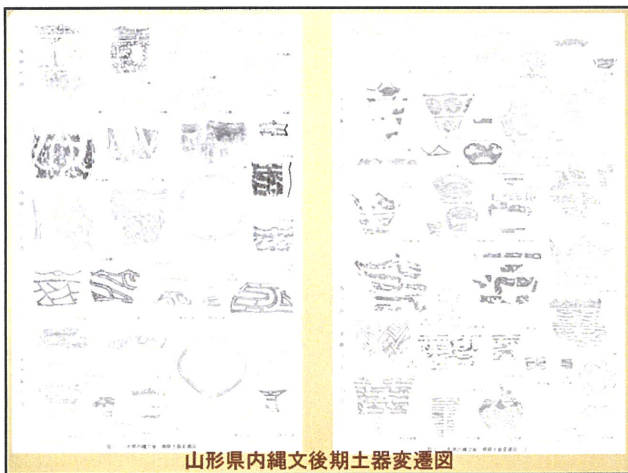


19

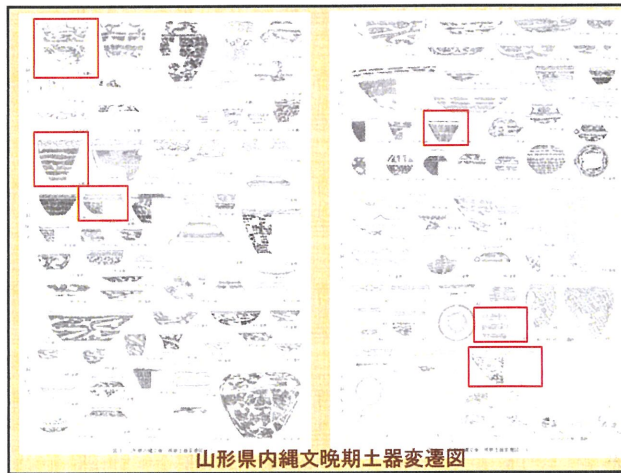
亀ヶ岡式土器の器種構成

- **粗製土器**
 - 深鉢形土器／鉢形土器
- **精製土器：7器種**
 - 深鉢形土器／鉢形土器／浅鉢形土器／皿形土器
／壺形土器／注口土器／香炉形土器
- **半精製土器**
 - 台付鉢形土器：東北部の大洞BC 2式以降に顕在化
 - 片口形土器：東北部の大洞BC 2式に顕在化

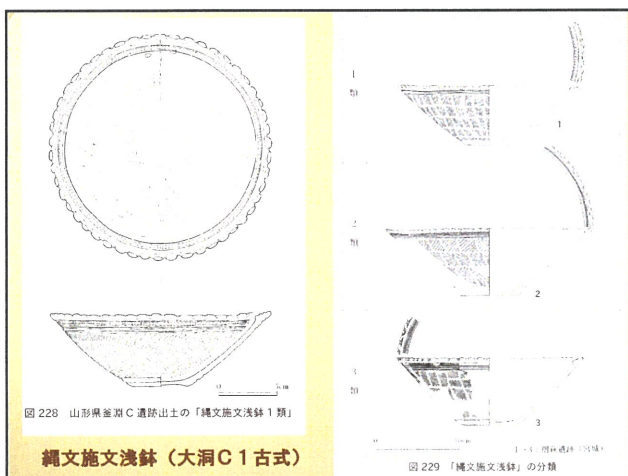
20



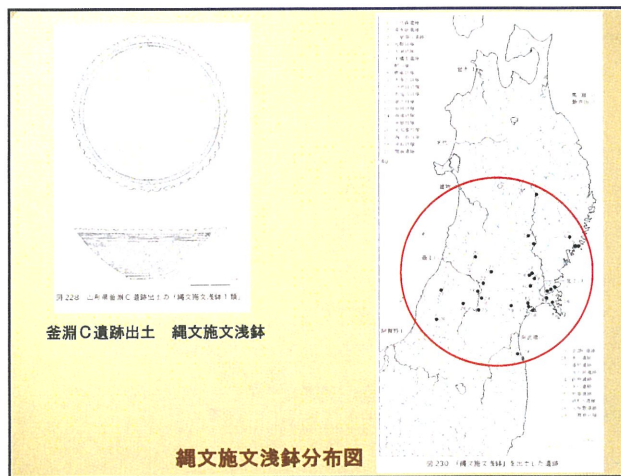
21



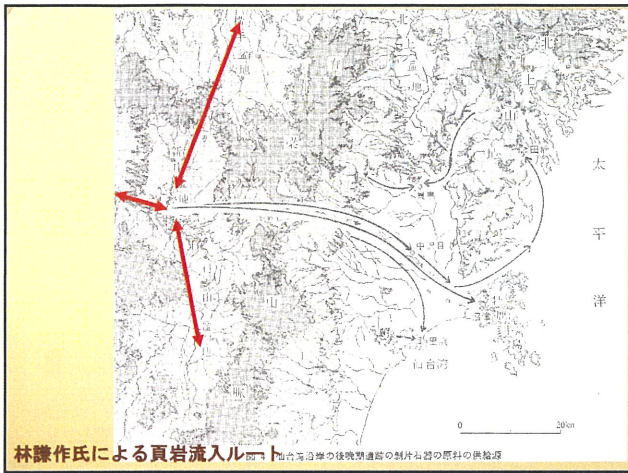
22



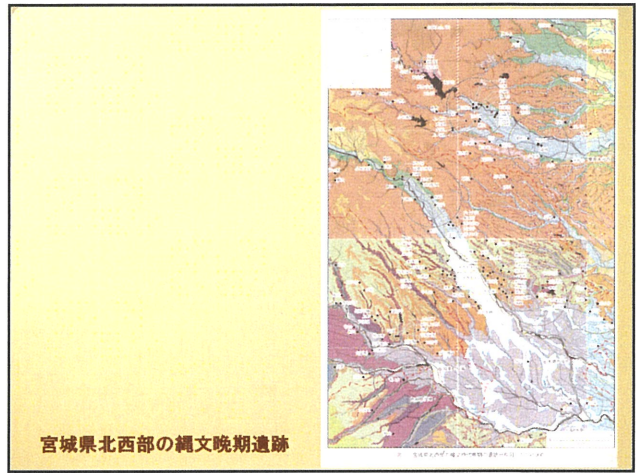
23



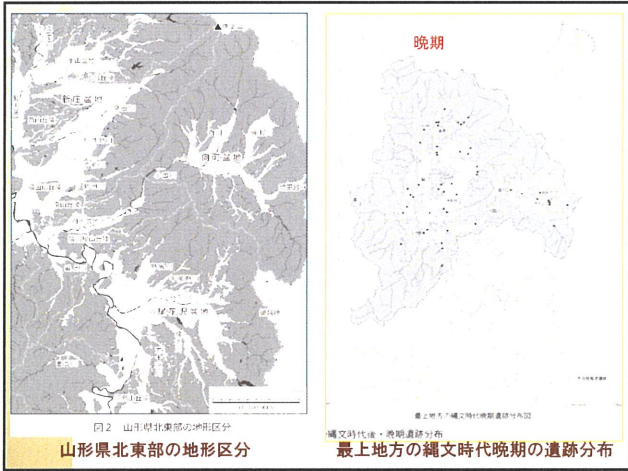
24



25



26



27



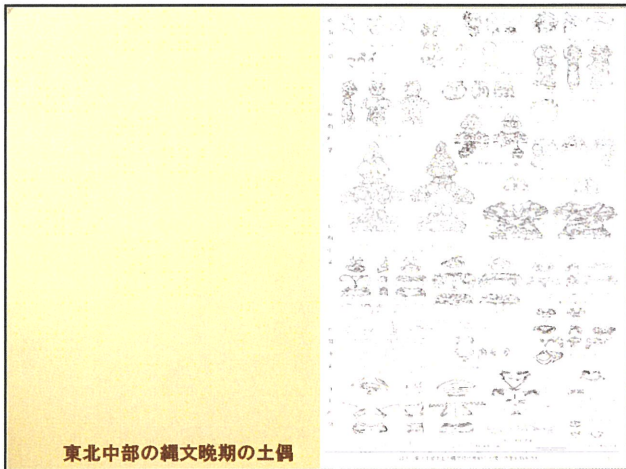
28



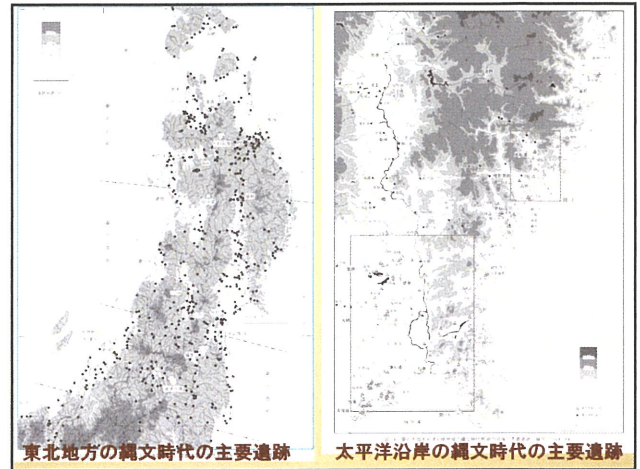
29



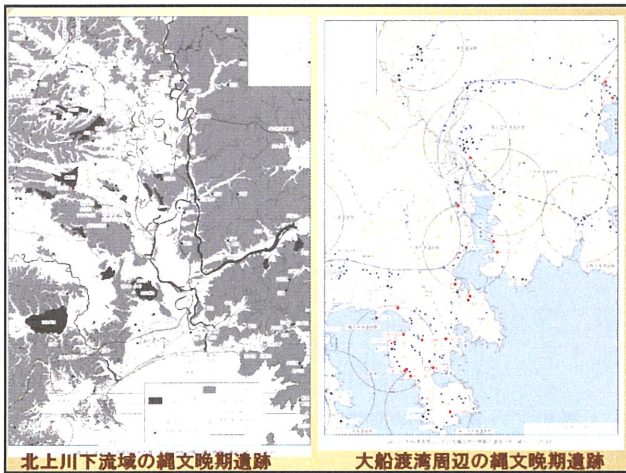
30



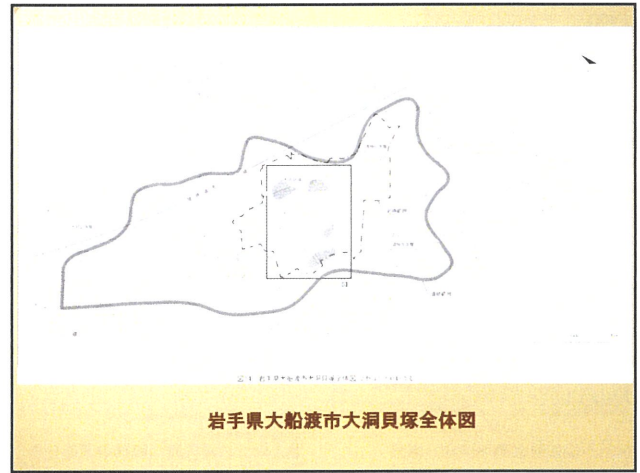
31



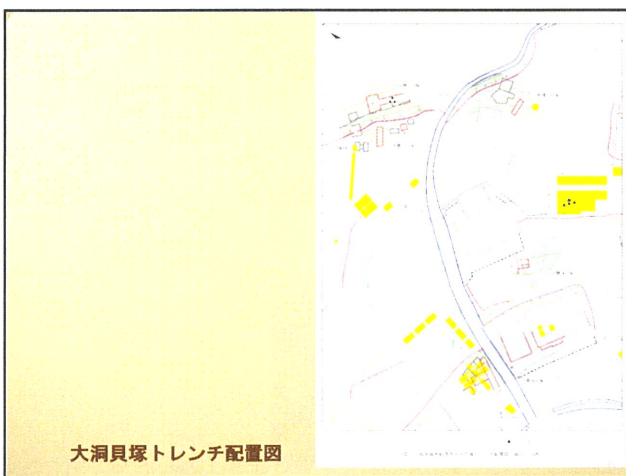
32



33



34



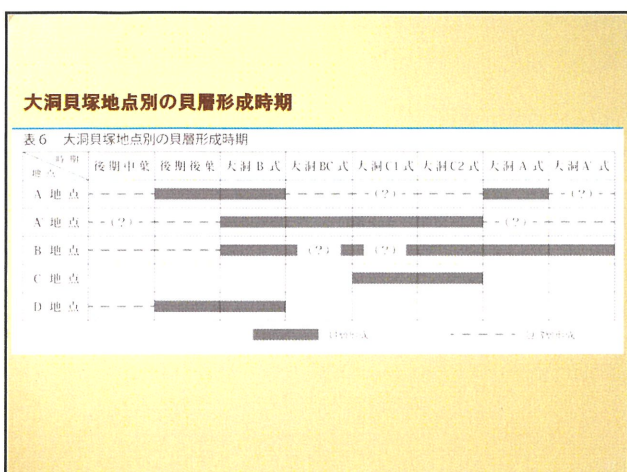
35

大洞貝塚の調査歴一覧

表5 大洞貝塚の調査歴一覧

調査年月	調査地点	調査主体	調査参加者	文献
1925年 4月	A・C地点	東北帝国大学	山内浩男・小田田隆郎	長谷部1925b
1925年 8月・9月	A・A・B・C地点	東北帝国大学	長谷部浩一・小寺貞良・丸山和・八幡 都 池上晋作・小田田隆郎	長谷部1925b
1933年 9月	A・B地点		角田文雄	角田1935
1934年 6月	A・A 地点境界		東倉・菊池隆昭	大船渡市教委2000
1936年 4月	A・A 地点	東北大学	江取輝雄・河見忠明・東倉・吉田義昭ほか	江取1936
1938年 10月	A地点	早稲田大学	西村正徳・金子忠三・中村忠次・和田信雄ほか	西村1962
1960年 8月・9月	A・B・C・D地点	昭和大学	清水潤一・江取輝雄・河見忠明・西沢正・鈴木公雄・渡辺 誠・赤澤威・高山 誠ほか	清水1963
1966年 3月	歴史館に指定（対象面積：3,310㎡）			
1984・95年	C地点	大船渡市教委	金野良一・及田 浩ほか	大船渡市教委1997
1996・98年	B地点	大船渡市教委	金野良一・及田 浩ほか	大船渡市教委2000
2001年 8月	歴史館に指定（対象面積：20,144㎡）			
2001・03年	A地点	大船渡市教委	及田 浩・金野良一・木見が次ほか	大船渡市教委2001

36



37

まとめ

- 最上地域は新庄盆地を中心に→日本海側と太平洋側を結ぶ**主要ルート**（頁岩・アスファルト）
- 北側の横手盆地、南側の山形盆地とも通じていた→**十字路としての地理的位置**。
- 尾花沢盆地と共通した地域圏の形成。
- 拠点集落としては、宮内遺跡（新庄市）、釜淵C遺跡（真室川町）、げんだい・材木遺跡（最上町）が存していた。
- 大洞C1古式期に**縄文施文浅鉢**が分布（宮城県北部と共通性）
- 晩期終末～弥生初期再葬墓の構築（内陸部では北限）
- 石棒の多出→粘板岩産出地との地理的關係

38

